

傳へられてゐる。またカプリニストは多くの單純素朴な抒情詩や、「奴隸制度に就て」「カテリナ二世による農奴廢止に就て」といふやうな短詩と共に、彼の處女出版である諷刺「態度に就て」「羅馬の隆盛」などで、その文名は亡びないであらう。

彼の作風は小さく纏つて明快優雅だ。彼は自然描寫に忠實な寫實主義の態度をとつてゐる。當時の作風としては最も目新しかつた。寫實主義の宣傳として見ても、彼の主作なる悲劇「イアベード」には生命がある。かゝる事情の下にあつた露西亞の社會には、來るべくして容易に來なかつた印刷物の普及時代が、遂にやつて來たのである。

カテリナ二世統治下の社會は、文化の發達に伴ふ個人修養の、最も容易且つ旺盛な時代であつた。露西亞の元祿時代と稱したいほど、生活に餘裕があり、風俗は優美に、文物は典雅に、民心は平和を謳歌した。カテリナ二世は西歐の文物、社會狀態の研究家であり、西歐の社會組織の長所を採り入れる主唱者であつた。女帝は西歐文藝の長所をも認め、その發達の歴史に想到した。露西亞に於けるジャーナリズムは、宮中に芽を萌したといつてもいい。私は此の時を起點として發行された新聞雜誌、この事業に關係した文學者達の傳記などを、こゝに述ぶる煩を避け、たゞ一通り是等刊行物の名と、概ね一流の文人であつた發行者と、その消長を表記するに止めたい。

「勤勉な蜜蜂」(月刊)スマローコフ。

「有用に費す閑暇」(週刊)貴族士官團體。

「自由の時間」(月刊)モスクワ大學。

「ためになる娛樂」(月刊)モスクワ大學。

「バルナサス山の囁き」(一七七〇)

「勤勉な蟻」(一七七二)

「饒舌家」(一七七二)

「資庫」ノヴィコフ

「藝術家」ノヴィコフ。

「モスコヴスキヤ・ヴエデモスチ」(一七六〇)ギムナジヤ。

「なまけもの」(一七六〇)ノヴィコフ。

「ロシア文人の歴史辭典論集」(一七七二)ノヴィコフ。

新聞雜誌によつて、讀書階級と文壇に寄與するところの大きかつた人は、露西亞最古の新聞・雜誌記者といへるスマローコフだつた。彼がその計畫を立て始めると、これに倣つて亞流の刊行物が簇出した。これら刊行物の發行者兼執筆者として雄名を走せ、後に筆禍を買つて投獄された人にノヴィコフがある。

新聞・雑誌を政府とは無關係の一大王者に育て上げ、その社説や評論に、恐るべき權威と力とを與へたのは、ノーヴィコフである。彼は無冠の帝王だつた。彼に關する逸話の一つとして言ひ傳へられることがある。出獄したばかりの彼が、ぼろ／＼の羊皮の衣服を纏ひ、その故郷へ歸つたときに、彼の家族、友人、村人が集まり乞食然たるぼろ服の彼のために盛大な出獄祝賀會を催して、憔悴せる彼を慰めた。郷黨はぼろ服の彼を狂喜して迎へ入れた。中にはその見すばらしく變り果てた珍奇な姿を見て、泣き出す者もあつたといふ。ノーヴィコフの功績と名聲とは、この一事によつても、想像し得られるだらう。

新聞雜誌刊行物に新生面を開拓したのは「歐羅巴新報」や「莫斯科新聞」であつた。セツシン、コストロフ、オゾレンモフ、デルジャヴィン、カプニスト以後の文壇大立者カラムジンについて記すならば、彼が傳説俗謡の有名な一つ「ミュロンのイリア」の作者であると思はれてゐることだ。彼が歐洲巡遊前の作品は翻譯が主であつた。二十五歳で歸國した時は、カテリナ朝も末期に近かつた。彼の主要著作は、詩人としてではなく、獨立せる歴史家として書かれた「露西亞帝國史」だ。この大著述には二十三年を費したといふ。この精力絶倫家に一つの提言がある。「饒古るやうに書け、軌範的文章家のやうに書け。」といふのだ。

從來の作家の文章に缺如せる「單純」と「自然的」、「生氣」と「洗練」の必要を説くと同時に、

それは教育家が用ひるやうな上品高尚な、論理的な文章でなければならぬといふので、この提言を想ふにつれても、彼が文章道に盡した功績の大きさが偲ばれるのである。カラムジンはロモノソフに劣らぬ文章家だつた。

「宗教書を使用するのは是非」といふ論文に見るやうに、當時の作家としての彼は、文章の型や氣分に非常な苦心を拂つた。また紀行文家としても從來の僧侶が試みたものとは、根本的に形式、内容を異にした新傾向のものを遺してゐる。

「露西亞旅行家の手記」などがそれだ。かやうな文章の型、傾向や用語の上の革新以外に、當時の露西亞文壇に何もかも注入されたとすれば、それは正に露西亞に於ける最初の感傷主義であらう。カラムジンの事業を概観すれば、歴史の研究發表と文章の改革と、感傷主義の紹介である。

カラムジンは彼自身が一個の感傷主義者であつた。彼が歐洲巡歴の間にうけた西歐文學の感化もあらうが、彼は本質的に甚だしい感情の強弱性を有つた男であつたのだ。「感情的」といふことは、いづれの作家の特徴でもあり、またさうであるべきだ。」といふのが彼の持論だ。感傷主義傾向は彼の作「哀れなリーザ」にも「貴族娘ナターリヤ」にも、顯著に現はれてゐる。これは二つの物語である。物語としての獨立した作品に乏しい露西亞の社會は、この二篇に對して、異常の讚辭

を呈した。

感傷主義センチメンタリズムの潮流は、カラムジン文學の承繼者イヴン・イヴノヴィツチ・ドミトリエフ及び、ヴラヂスラフ・イヴノヴィツチ・オジオロフによつて傳承された。前者はその感情主義センチメンタリズムを史論、抒情詩に生かし、後者は戯曲に植ゑつけた。ドミトリエフには「わが一生の回顧」。「流行を追ふ妻」。「狂想家」などの、小話風の物語がある。それは彼が愛讀したラフォンテーンやヴォルテールからの借りもので、彼本来の面目は、かやうな諷刺物よりも、詩・小唄にあつた。オジオロフには、一七九四年、これを提ひきげて文筆生活を始めた「エロイズからアペラールへ」と題する英雄詩の後に、有名な「アデンのオエヂブス」や「フィンガル」。「ドミトリ・ドンスコイ」等の悲劇がある。むろん詩劇だ。「フィンガル」は古代ゴール族をモデルにしたオシアン風のもので、北國のアチールを描かうとしてゐる。この悲劇はこれを上演したセメヨノワ（後のゴガリン公妃）の力にあづかつて好評を博してゐる。

「ドミトリ・ドンスコイ」が出版されたのは、露西亞と佛蘭西（ナポレオン一世）が、砲火を交へてゐる最中であつた。（一八〇七年）。露西亞人の祖國愛は高揚されてゐた。その愛國心の一つの現はれとして「ドミトリ・ドンスコイ」は書かれたこと疑ひを容れない。この當時は大敵ナポレオン軍の侵攻から、祖國を護る國民の、愛國心を鼓舞するために、いろ／＼の作品が續々發表

された。クルコスキの「ボジヤルスキー」はその一つである。

この當時のオジオロフは、師匠格のデルジャヴィンの眼中にはなかつた。彼は元來佛蘭西人で、露西亞に歸化し、露西亞語で作品を書いたが、彼の露西亞語は、彼の佛蘭西語に數段劣つてゐる。さういふ些細な事柄を取上げて、同時代の文人たちは、最初は相手にしなかつた。その後、佛蘭西文學から脱却しかけた是等の悲劇類は、偶然の機運に際會して、目醒ましい歡迎を受けるに至つた。もつとも「ドミトリ・ドンスコイ」の中に登場するドミトリ・アレキサンドルや、マイヤやゴルシカ生れの鞆カウチ人カウチ人には、その頃の興奮せる人々によつて、さまざまの缺點を摘發され、他の悲劇のやうな大好評をおほいにすることは出来なかつたといふ。だが悲劇作家としてのオジオロフの名は、アレキサンドル一世時代の文學史の上から、抹殺することが出来ないほど、感傷主義センチメンタリズムは露西亞文學の主流へ棹さし進んだのである。

### 第三篇 近古文學とその時代

#### 詩と詩人

ワシリイ・アンドレヴィッチ・ジュコーフスキー

露西亞文學の始祖詩人であり、批評家の一人であるジュコーフスキーは、一七八三年中部露西亞のツィラの一貴族に從屬するブーニンといふ地主の子に生れた。母はこの地主の、土耳其生れの下婢で、彼を生んだのは十六歳の時であつた。この地主にはジュコーフスキーのほかにも多くの子どもがあつたけれども、それは女ばかりであつたために、いはゞ幼ジュコーフスキーは生れながらにして、廣大な土地所有者となつたわけである。しかもこの幼兒はブーニン夫人が、十一人もの子の母であるにかゝはらず、至極物のわかつた婦人であつたために、ブーニン家の人々の非常に手厚い好意の下に引取られたのである。彼は親の顔も知らない嬰兒時代から十一歳になるま

で、これらの人々の愛情と親切の溢れる、行き届いた家庭のなかに育くまれた。幼名のワシリイは姓と號とから取り、アンドレイツチとジュコーフスキーとは、アンドレイ・ジュコーフスキーといふ父ブーニンの舊友にして、いつも彼の家に寄寓してゐた人の名を取つてつけたものであつた。この幸福な庶子の教母は、ブーニン家嫡出の娘のユシニコフ夫人で、ツィラの町では最も知的藝術的生活を營める家に嫁いだ。幼くして愛すべき少年ジュコーフスキーは、十一歳から十四歳までの三ヶ年を、こゝで過したのであつた。ユシニコフ夫人はこの少年に授くべき最善の教育とその最も好適の機会を與へた。青年時代の詩的情熱と、貴族的浪漫的な天賦の才能を善導助成するに最も好適の場所であるツィラ市北方の、モスクワの「大學貴族寄宿舎」に入れたのであつた。かくてこそ三十四歳に至つて、彼、ジュコーフスキーは、アレキサンドラ・フイヨドロヴナ（ニコライ第一世の妃）に對して、始めての露西亞語の教師たり、進講の役をも得るに至つたのである。續いてその皇子アレキサンドル二世の家庭教師ともなつた。この皇儲の七歳（一八三五年）まで、最も重い責任の總てを委ねられたのであつた。皇子即位の後も、皇帝二十四歳まで教師として側近にあつた。いはゞ彼は、一個の皇室の家庭教師ではなく、アレキサンドル二世の親愛なる友達であると同時に、ロマノフ家の新らしき友でもあつたのだ。「庶子——土耳其人（トルコ）の下婢が生んだ子ども——これが皇帝の家庭教師であり、王家の親しき友達であるとは、そもそも如何なる次第で

あらう？」と世人は怪しみ訝つたが、それは言ふまでもない、偉大なる詩的天分と、眞實なる理想主義の抱負と、限りなき浪漫的性格を有つた教養高き人間であつたゝめである。私生兒といふ境遇が、彼の天才に何の關係があらう。

ジュコーフスキーの浪漫的性格の中に潜む、憂鬱な陰影、いや、憂鬱の中に潜める浪漫的性格は、彼の母からの感化による、幼時の環境の生み出せるものである。自分自身の素性もわからぬ幼年時代に於て、既に遠慮がちな慎み深い彼の素質は窺はれた。彼の生母である土耳其少女サラの慎み深い性質は、彼の憂鬱の陰影を形造る素因たるに充分であつた。かくて幼年時代のジュコーフスキーは、學業については、大した才能も發揮はしなかつた。頭腦のいゝ彼にとつて、學問そのものが餘りに無味なものであつた。それは彼の最初の家庭教師として雇はれた人物が、モスクワの洋服屋であつたのに徴しても、容易に推察し得る。此の家庭教師はジュコーフスキーに嫌悪され、間もなく解雇されてしまつた。次に彼はブーニン家に寄食してゐたアンドレイ・ジュコーフスキーを、家庭教師として迎へたが、長くは續かなかつた。これも彼の氣嫌に觸れて失敗した。彼の性格は、やがて彼自身を小學校から放逐されざるを得なくした。彼は十一歳から十四歳までを、姉ユシニコフ夫人の家庭に引取られて生活しなければならなかつた。少年の知的生活は其の頃から急激に、然も豊かに眼を見ひらいていつた。それからの四ヶ年、モスクワ大學在學時

代こそは、實に彼の後年あるべき、總てを決定的に育成した時代であつた。いはゆる「貴族學校」の此の大學は、詩人ヘラスコフによつて建設されたものであつた。一體このヘラスコフといふ人は、非常に洗鍊された性格の所有者であつて、しかも風雅で繊細な感情を持つてゐる好々の人物であつた。當時上流階級の青年子弟の教養の基礎を築くべき、唯一の學府がモスクワ大學であつたのも、必ずしも偶然とはいへない。この大學の目的は餘り多方面にわたり過ぎてゐたが、教化の目的主義は極めて正しくはつきりしてゐた。ジュコーフスキーが、後年、教育事業に對して正しい興味と熱情を抱いたのも、この邊に遠い根ざしを持つてゐるのだ。

大學時代の彼の才幹は、幼年時のそれと異つて、思ひきり發揮された。彼の周圍は華やかに活躍に動いた。「露西亞語講演同人社」は創立され、推されて彼はその結社の幹事長となつた。因に此の結社が露西亞に於ける學生結社の嚆矢といはれる。當時の彼の最も輝かしい部分は、彼の雄辯と、詩人としての驚くべき性情であつた。鋭い批判に基づく彼の迸るやうな熱辯には、全く驚嘆すべきものがあつた。然しかうした華やかな彼の學生生活は、思ひがけぬ障壁に行き當つてしまつた。教母ユシユコフの訃報が、彼を訪れたのだ。彼は氣も狂はんばかり嘆き悲しんだ。自分といふものが根底から覆へされたやうな絶望と苦惱に沈吟した。その處女作詩「墓場に寄する」は、この悲嘆のどん底に生れた。これは此の詩人の「若き日の冥想」の處女傑作として、大いに

驅はれたものだ。

大學卒業後の彼は、暫くのあいだ政治上の仕事に携はつてみた。基より長續きはしなかつた。やがて養家の家族と共に田園に奔つた。四年間の學窓生活から、田園の家庭生活に入るまでの彼は、詩作と獨逸・佛蘭西・英吉利の著名な詩の翻譯を怠らなかつた。西歐文學に對するジュコーフスキーの研究は極めて熱心であつた。グレイの「哀悼歌」を露西亞に紹介したのも其頃である。これは昔に勝れた譯詩であるばかりでなく、恰もアラン・ポオを通してポオドレールを見るやうに、グレイの詩の中にジュコーフスキーを發見することの出来るものであつた。その陰鬱な著しい主觀的情緒は、當時の露西亞人の一般雰圍氣に適合してゐたため、忽ち人々はこの譯詩に共鳴した。たゞ彼の家庭生活に於ては、彼にとつて傷ましき戀愛事件が起つてゐた。情熱詩人の戀の相手は、ブーニン家の末娘であつた。運命は皮肉に動いてゆく。美しき末娘も若い青年の心中がわからぬことはなかつたが、不倫な戀が成り立つわけはない。ジュコーフスキーが田園に去つた理由の一つは、この苦惱を忘れるためでもあつたが、この哀れな戀愛は、後の日のジュコーフスキーの聖き心の光明となつて、彼の生活を輝き照したのである。二人の間の關係は非常に深く保たれ、彼女に對しては、宗教的な尊敬をさへ持ち續けるに至つた。それは彼が五十八歳まで結婚しなかつた事實を見ても解る。彼が晩年に及んで娶つた妻は、彼の友人である獨逸の美術家の娘

だ。とにかくグレイの「哀悼歌」を世に發表した彼は、一躍して文學的位置を獲得した。その頃の露西亞では、眞の小説といふものは、殆んど理解されてゐない状態だつた。カラムジンの「憐れなりーザ」的誇張で、虚構された作品に、安價な涙を注ぐ程度の、幼稚なものであつた。ジュコーフスキーは國家主義を楯に、浪漫主義の旗を振り翳し、青年の間に同感共鳴の空氣を擴げながら、安價低調の感傷主義を、世間から掃蕩することに努めた。この努力のために、彼自身の藝術への途を誤るやうなことは決してなかつた。この努力は次第に效を奏した。浪漫的な美しき空想は、世の人の醜惡を掩ひかくす唯一のヴェイルとはなつた。

ナポレオンが突如として、その姿を雪の露西亞に現はしたとき、この情熱詩人は、いはゆる「モスコの夜の焰」に出會つた一人である。ジュコーフスキーは勇敢なる一戦士として、クツゾフ元帥の率ゐる先鋒隊に加はつたのだ。この機會は偶然にも彼を有名な「ボロヂノの大會戰」に参加せしめた(一八一二年九月七日)。ボロヂノは莫斯科西方七〇哩の町で、ナポレオンが露西亞軍と一大血戰の後、これを陥れ、行軍七日を経て莫斯科の王宮に入つた。ために此の町も有名である。あらゆるものを抱擁しなければ止まないほど、熱狂してゐた愛國者たちに激勵鼓舞され、ジュコーフスキーは「陣營の戦士」一篇を作つて公表した。戦後に於て、この作は露西亞の各層から大歡迎をうけ、時の寓話作家ドミトレフスキーなどは、讀み終るや直ちにこれを皇后に獻じた。これ

がそも／＼の機縁となつて、ジュコーフスキーは宮廷にかしづくやうな成り行きになつたのである。

宮廷に奉仕した境涯——といふよりも、皇太子アレキサンドルとの親密な友情關係——の生活では、かなり無駄な時間を空費したらしい。退職後は外遊の途に上り、結婚し、獨逸に尻をすゑた。滞獨實に二十年。決して短かいものではない。この間に彼は散文詩の創作と西歐文藝作品の翻譯に専心没頭した。ジュコーフスキー時代の露西亞詩壇は、歴史の上から眺めて、見逃すことの出来ない繁忙な時期であつた。クルイロフ、カリツオフ、レルモントフ、ピエリンスキー、プウシキンなどは、いづれも此の時期に活動した人々である。ジュコーフスキーの死の前後に生れた人々こそは、文豪トルストイに至る近代露西亞文學の大立物たちである。これらの人々とジュコーフスキーとの個人的關係については、一通り述べなければならぬ重要な點もあるが、それは他日の機會にゆづる。さて以上をもつて、彼の生涯の素描は略終つた。更に彼に關する他の文學者の批評に移らう。有名なピエリンスキー(一八一〇——一八四八)は、彼について、かう言つてゐる。

「ジュコーフスキーの作品からは、國民的構成分子を除いて他に何も見出すことは困難である。これは明らかに一箇の大きな缺陷に相違ない。が同時に決して悪い素質でないといふこ

とも断つて置かねばならない。もしも國家主義が彼の詩作の基調を形成してゐるものとすれば、その浪漫的な性格の進展を期待することは、決して出来なかつたであらうし、また、露西亞詩壇にしたところで、豊かな浪漫主義の中に生長してゆくことは困難であつたに違ひない。彼の基本は浪漫主義にあつた。だから愛國詩人たらしめた彼の努力は、常に未知の艱路を辿る彼の性格を表現しようとして、その偉大なる天才を傾け描寫する「哀感」そのものを高調してゐるのである。

と、これは同じ露西亞人、ペリンスキーの評語であつて、やゝ内輪譽めの氣味がないとはいへない。著者は更に忌憚なき批評家として、有名な英利西文學者モオリス・ペリングの説を引用してみよう。「獨逸浪漫主義を露西亞に紹介したジュコーフスキーは、また浪漫主義を露西亞から追放した人である」

とペリングは言ふのた。ペリングの態度は冷たい。ケー・ウエリシコフスキーは更に突込んだ態度で、冷酷に眺めてゐる。

「浪漫主義が露西亞に紹介されたのは、一にかゝつてジュコーフスキーの功であるやうに喧傳されるが、それは單なる幻覺に過ぎない。讀者諸君はオデイツシイ（筆者註——「ホーマー」の二大敘事詩——「イリアッド」「オディッセイ」後者はトロヤ戰爭の勇將オデッセウスが、神怒に觸れて歸路海上に彷徨し、その妻ペネロペが二十年間家居にあつて苦節を全うした、ことを書いたものである）の移植に、その文學

的生涯を縛られてやつた浪漫派の或る作家を想起することは出来ないのであらうか？」新しい詩の力に歸着すべき偉大な標準とか、題材は全く彼の身邊から蒸散揮發し去り終つて、後年纔かにバイロンの懷疑論や、ヘインの皮肉な觀察が、唯一の玉手箱となつてしまつてゐる」

と、この觀方は餘りに酷である。露西亞に於ける浪漫主義文學の生命は、成る程極めて短かつたことは事實であつて、それは總て露西亞藝術の眞の構成に最も適したリアリズム（現實主義）に、道をあけて讓歩しなければならぬ運命を背負つてゐたものである、と見るのが正しくはないだらうか？敢てジュコーフスキー一人に責を負はすべきではあるまい。どちらにしても、たとい兎角の批難はあつても、ジュコーフスキーが露西亞浪漫派文學の鼻祖、乃至露西亞屈指の愛國詩人として特に尊敬されねばならぬことは、こゝに言ふまでもない。

「露西亞には、いはゆる文學上の中世紀なる時代がなかつた。ジュコーフスキーはそれを我々に示してゐる

とビエリンスキーは明確に斷言してゐる。然し全くのところはジュコーフスキーは此の中世紀を造つた人であつた。たゞその期間が短かゝつただけである。それもジュコーフスキーの罪に歸すべきではない。彼はそれを郷土文學として、地方々々の傳説などから民族性を研究し、それを彼一流の麗筆で、民謡や哀歌の優雅な色彩を借りて紹介した。然しそれは總て國家主義的の濃厚な



浪漫主義諧調を辿つていつた。何といつても彼は露西亞浪漫派藝術を形成した先驅的詩人であつたことは否定すべくもない。

詩人としての彼が、宮廷につかへたことについて考ふるに、彼が最初露西亞皇妃の國語教師として、皇太子の家庭教師として任用された頃、人々は「詩人、節を捨て、宮中に入る」と稱して非難した。ブウシユキンすらも痛烈に罵つた。だがジュコーフスキーにとつて、宮廷生活は決して、望ましいものではなかつたのである。「陣營の戦士」(一八一五年作)が發表されてからジュコーフスキーに注目しはじめた女皇は、ウヴァルフ伯爵に書を送つて、次のことを依頼した。

「わたくしはジュコーフスキーに就て『大きな計畫』を持つてゐます。その計畫について、彼が歸つて來次第に、わたくしの名を使つて、是非、この旨を彼に告げて、約束して下さい」云々。かうして買ひ取られたジュコーフスキーの書簡の一節には、次のやうな傷ましい文句さへ仄見え。それは如何に彼が淋しく感じたかを物語るものではないか。曰く。

「『大きな計畫』は甚だしく私を驚かした。それは私の詩想を幽閉(宮中に)する準備ではないのかしら？」

だが宮廷生活は、彼の最初の豫想とは多少異つたものであつた。彼自身を發見したミリユウは、優美な、しかも簡楚な氛圍氣、或は知識階級の周圍であつた。皇后アレキサンドラ・フイヨドロ

ーヴナは文學趣味の豊かな女性であつた。ゆゑに、彼は宮廷生活に引摺り込まれた形となつた。皇后の西歐文學に關する該博な知識は、ジュコーフスキーを彼女に接近させる磁力となつた。彼は皇族たちと親密になつていつた。彼は「王家の一人」として待遇される時もあるが、彼はそれを望まなかつた。彼は皇室をめぐる人々の野心や陰謀の世界に足を踏み入れることを恐れた。もつとも彼が寵臣の一人として、ある程度の我が儘な振舞ひは、彼自身が反省するほど屢々であつたらしい。兎に角、十數年間の宮中生活が彼にとつて望ましく楽しいものゝ總てでなかつたことは確かだ。彼が國家主義者としての事實については、多くの記録がある。彼は君主主義の思想を根底としての、最も偉大なる理想主義者であり、且つ人道主義者でもあつた。この思想は彼を專制主義讚美者にまで導いた。彼の專制主義の行き方は根強かつた。アレキサンドル二世に對する彼の教育法は、いつでも此の思想で進められた。

「人民に對する皇帝の愛がなければ、皇帝に對する人民の愛もないのである」

彼は皇太子に常に反復して恚う教へたのだ。ヴォルテールがフレデリック大王に獻じた言葉と比較してみても面白い。更に一層具體的に彼の思想的背景を知る方便として、彼の言葉の中から見出さう。

「各國政府は、その標語のやうに、常に正義を保持すべきである。個人の犯罪は、やがて政府

によつて犯されたる犯罪のやうに認められる」。『國家建設の中には、絶對主權者の自由意志が存在する。專制主義は行政權ではなくて、それ自身單なる思想である』と。

「わが露西亞は、ビョートル大帝が我々に解放してくれた歐羅巴への門戸を閉鎖してしまつた。その結果は、我々がなすべき正當の旅行さへ出來ない。しかし神は次に來るべき總てを知り給ふ。人民に國家に愛着せよと強要することは全然不可能に屬する。強いて求むれば、事實は反つて、これより逃れいでん事を望む。あたかも過つてゐる施設や、頑迷固陋な宗教が齎らす結果のやうに。須らく國家をして家庭の如く、住みよくあらしめよ。勇を鼓して門戸を開放せよ。人々の欲する生活を拒むこと勿れ。然すれば總て彼等は總てを知るであらう。人々をして各自の家庭に於ける安寧と幸福を享けしめよ。然すれば彼等は國家の齎らす平和と幸福の價値を了解するであらう。家庭生活の神聖を崇敬せよ。總て國家の神聖に類づくことともなる。かくして總ての安寧幸福は各自の安寧幸福の裡に見出さるべきである。」と。

「法律を護れ。汝等の愛國心は燃え立つだらう！」  
と。これで見ると、彼は熱烈な國家主義者であり、君主主義者であり且つ專制主義者であつ

たことがわかる。「基督教的な屈辱や謙遜は、また專制主義の王冠である」といつて、專制主義を高調してゐるが、結局彼の專制主義も常に「人間同志の愛情」を根底とした思想の發現であつた。いひかへると「詩人的專制主義者」であつた。マキアベリ流の政略的なものではなかつたことが明らかに窺はれて微笑まれる。

ジュコーフスキーの生命である詩作について簡単に述べよう。「陣營の戰士」は言はゞ假稱的古典主義の、死に瀕した世界と、將に芽生へんとする浪漫主義との境界にあつて作られたもの。過渡期的産物である。その頃の露西亞は國を擧げて、愛國の熱情に燃え立つてゐた。またアレキサンドル一世は、藝術に非常な興味をもち、藝術的靈感には悉く自らを打ち込んで顧みないほどの熱心家だつた。レルモントフは、その頃、一兵卒の口を藉りた詩の形式を通して、軍國的愛國心を熱烈に鼓吹したものだ。ジュコーフスキーの詩もまた常に國家主義に翼をのばし、愛國心を高潮したものには他ならない。その詩が詩としての偉大なる價値を充分に有つてゐることは、いふまでもない。彼の詩風は古い鼓と胸甲とで固められた堅苦しいものではなくて、露西亞語の極めて上品な洗練された文體で綴られてゐる。その時代の貴族仲間を用ひられた言葉は、いかにも高雅な氣品のある調子をもつてゐた。彼の詩はまた主觀的傾向のほかの新らしい第一歩を開拓した、革命的作品でもあつた。

「杯をとりて」や「スヴェイトラーナ」は一八二二年の作で、彼の作品のなかでも、最も異色ある傑作といはれる。殊に「スヴェトラーナ」は、その作風が獨逸の或る作品から、構想を得たものであるとか、キイツの「アグネスの死」から暗示をうけたものである、とかいふやうな兎角の評はあつても「ジュコーフスキーの最も傑出した作品」として記録さるべき價值あるものだ。彼は主題として露西亞人を選ぶとき、どんな思想と、どんな言葉とを共に選擇すべきかを心得てゐた天才である。それは「スヴェイトラーナ」の中に現はれてゐる浪漫的神祕主義と、それを表現する技巧とを見てもわかるだらう。(この代表作をこゝに掲げようと思つて、わざ／＼翻譯したが、全部で二十一節あり、紙數に制約されて割愛するの止むなき次第を残念に思ふのみである。その代りに短篇「花に寄する歌」を紹介することにした)。

#### 花に寄する歌

一

萎びて棄てられた花よ

脆い草地の美しさ

虐い秋の手は

お前から夏の魅力を奪り去つたのだ

二

おゝ！年々はまた繰返し

同じ運命を總てのものに齎すのだ

私たちの歡びは片はしから飛び去り

お前たちの花びらは一つづゝ散つてゆく

三

そのやうに夕毎の鐘はひびき

ある亡びたる夢か歡びの音の

飛び去る時刻は

深く楽しんだ幻影を一つづゝ消し散らす

四

人生の幻影は假面を脱つて横たはり

希望の星はいよよ蒼白く燃ゆるよ。

賢者は昔からかう尋ねてはゐないか

人間と花と何方が脆いか？と。(ジュコーフスキー)

寓話作家（一七六八—一八四四）イワン・アンドレヴィッチ・クルイロフといふよりも「クルイロフお爺さん」で、露西亞人に親しまれてゐる詩人だ。露西亞文學は餘りに人生の永久的な大問題ばかりを取扱ひ過ぎたやうだ。ジュコーフスキーにしろ、プウシユキンにしろ、はたまたニエクラーソフにしろ、ゴーゴリーにしろ、あまりに熱情的な反抗精神の強大な文學者たちであつた。こゝにたゞ一ツの子供に對する文學者がある。即ち「クルイロフのお爺さん」だ。彼はこの呼稱の示すやうな、でつぶり肥つた、親切な温情を湛え、而も聰明な智慧の輝きをもつところの、眞に好き「お祖父さん」であると同時に、露西亞古典文學の「祖父」でもあつた。イワン・クルイロフの出現までには、實際、露西亞には少年少女に讀まれる詩といふものはなかつた。僅かに古典からの引用や、何處から渡來したかわからぬ、しかし可愛い短い詩の類を讀み聞かされるに過ぎなかつた。しかもそれらは少年少女に、半ば無意識に繰返されるに止まり、子供らの心に觸れるものではなかつた。子供らが喜んで聽く物語や童話と稱すべきものは、いづれも成人、即ち子供らのはゆる大人の讀みものであつた。子供らの父や母は、口をひらき眼を見張つて聽き惚れる子供たちに、プウシユキンやカリツオフや、アレキセイ・トルストイやフェットやボロ

ンスキーなどの心魂を奪ふやうな、面白くて教育的な古典の詩と物語を話して聽かせるのである。しかし一度、人の頭に入ると、一生忘れることが出来ないで、その成長と共に物語の意味の深くなつてゆくのは、クルイロフの作品に限られてゐる。この價値はクルイロフの物語が、次々と作られるに隨つて、一般に認められ、續いてその眞價は、教育家、文壇人らによつて支持されて來た。露西亞の古典詩壇に於ける *Visitation the Furious* など、外國の文人達にいはれるほど遠慮のない鋭さをもつて文學界を分析し、批判した批評家ピエリンスキーによつても、認められるに至つたのである。

クルイロフ以前にも、寓話作家が二三ないではなかつたが、クルイロフが現はれてからは、彼以前に寓話作家は絶無であつたといつても誤りではないほど、影の薄いものであつた。彼は鋭敏な洞察力をもつて、見るものゝ總てを吸収し、それまでの露西亞語を以てした寓話作家等から、一等地を抜いた。ピエリンスキーは彼の粗野な物語に於て、露西亞の國民性を具象化したことに對して、つむじ曲りだと言つた。つまり眞面目と飄輕の相矛盾した手法を用ひて、物事を叙述したからであらう。彼は批評家をして冗漫の譏りを放たしめなかつた。何故ならば、彼は表現せんとするものを確然と掴み取り、一字一句をもゆるがせにしない藝術的手練を持つてゐたからだ。加ふるにその作品の藝術的價値を高からしめたものは、彼の生々とした諷刺、頓才、機智であつ

た。露西亞人の現實的常識は、クルイロフの寓話に於ける判斷を、正しき立脚地として受取らねばならなかつた。例へば無批判的輸入文化を諷刺した「獅子の教育」に於けるが如く、アレキサンドル一世のラハープの影響の下になしたる瑞西の教育は結局證明された。何故ならば共和黨の思想は失敗に終つたからである。また「百姓と蛇」や「蜂と蠅」の話は、我らの心は教育的思想によつて、如何ともすることの出来ない事實を指示してゐる。即ち外國の思想に對しては、疑惑のみ表現した。つまり彼の教育に關する考へは、自國の知識の中に見出されねばならないものであつて、外國の政治家などによつて爲されるべきでない。健全な家庭の健全な感化によつて育成しなければならぬといふことを主張したのである。次々に作り出された寓話は、非常に多くの露西亞官憲の直接批難である。彼の觀察はあらゆる角度から、あらゆる方面に向けられた。史的事件はいふに及ばず、法の亂用、警察の官僚的取締、片手落ちの裁判、行賞の不公平、間違ひだらけの哲學、それから人間の性質の中にある愚鈍性などを、辛辣に諷刺した。例へば *Kyma ruca* などは、少しも正直でない士官の、いろ／＼なトリツクを書いたものである。彼の時代は彼の生々とした描寫によつて、市場に曝露された觀がある。

クルイロフの父は、オレンブルグの町が、ブガコフの暴動で脅かされてゐる頃の、下級士官であつた。クルイロフ少年時代の回想録の中では、三歳の勇敢な小兒が、この町に勃發した暴動の

ために加へられた家庭生活の不安恐怖を、いとも冷靜に眺めてゐる姿を、如實に見ることが出来る。クルイロフが父を喪つたのは、七歳の時であつた。少年は淋しき母を師として、僅かに讀み書きを學んだ。彼は一生を通じて其時のことを忘れなかつた。かれら母子は餘り富裕ではなかつたが、父の死後の貧苦は極端に達した。母はバタとパンとを得るために、あらゆる恥を忍ばねばならなかつた。獨り残されて家にあるこの少年は、父の書架の中に隠れてゐたといふ。少年は古くさい小説や物語などを讀みながら育つた。十五歳頃の彼は、短い喜劇を書きかけた。やがてベテルスブルグ（今のレニングラード）の一官署の悲惨な給仕になつて、年俸二十五ルーブルを貰ふやうになつた。首都に於ける少年の生活は、しかし、書店、出版社、新聞雜誌記者や作家たちに接近する機會を彼に與へた。かくて彼は生活その他あらゆる方面に、奮闘の結果、創作の世界に足を踏み入れることが出来たのである。そのための努力には、決して消極的でなかつた。彼は常に自己修養を怠らなかつたが、新聞社會に入つたり、雜誌を刊行したりして、ユウモラスな短詩や喜劇や、音樂的笑劇を書きながらも、それを通じて、その諷刺的な鋭い才能を示すことも、また忘れなかつた。かくて四十歳に達するまでは、餘暇といふものを全く持たないほど多忙に働いた。彼が名聲を博するに至つたのは、五十歳に手の届く頃である。ラフオンテインの三つの寓話の露譯こそは、彼に名をなさしめたのだ。これは最初の翻譯ではあつたが、正に彼自身獨特な

詩的才能を、發揮する機縁であつたといへる。翻譯ではあるが、その全體を露西亞精神に變へてしまつたのである。それから後、悠々たる自信をもつて、彼本來の寓話に手を染め始めたのだ。こゝに於て彼の文名は、頗る高まり、彼の著書は、既に生前に、百萬部を賣り切る盛況を呈した。なかんづく處女出版に屬する二十三篇の寓話集は、驚くべき成功を齎した。ジュコーフスキーなどは堂々たる意見をのべて、これを賞讃した。間もなく彼は皇族の寵遇をもうくるに至り、中央文壇の知遇をも得た。ジュコーフスキーを始め、ブウシュキン、ヴァアゼムスキー公、デルジャヴィンなどゝ交り、教育界にも立ち入つた。そこで兒童たちからは「クルイロフお爺さん」と敬はれ、アカデミーの會員に任命され、佛蘭西では「Fontaine Rusee」（露西亞のデ・ラフォンテーヌ）と呼ばれて、一八一二年には帝室圖書寮頭となり、多大の報酬を得るやうになつた。

その佳作や性質の飄逸だけを觀る者の眼には、いかにも彼は安逸懶惰の生活を樂しんだやうに見えた。即ち彼は氣が向かなければ、決して筆を執らなかつた人であると。しかし一度筆を執れば、一氣呵成に作をなすといふ風で、面白半分に頭にうかぶ事柄を、自然のまゝに書いたかのやうであつたことは確かだ。彼は結婚さへも、面倒くさい事務と心得て、それを避けた。鳩の巢のやうに、むさくるしい帝室圖書寮の書籍の堆積裡に、二十七年の間、何の不足もなさうに暮した。或る部屋などは、がら空であるかと思ふと、他の部屋は彼が氣紛れに買込んだ贅澤な品々で、

いつばいである。しかもその品々たるや、買ひ込んでから二度と眺めはしないのである。彼が家庭生活に於ける唯一の友達は、老ひばれた一人の婆さん料理人であつた。それはいかにも哲學者のやうな氣風の、朴訥な露西亞精神をもつた老婆であつた。クルイロフの友人や、彼の崇拜者たちが、いつも書物の散亂した部屋の中で、この二人が一緒に寢椅子に凭りかゝつて、うつらうつらと居睡りしてゐる光景を見つけるのは、決して珍らしいことではなかつた。その古ぼけた寢椅子の眞上の壁には、大きい重い額縁の油繪が、いかにも危ツかしい恰好で、長く懸つてゐた。この額縁が落ちてもしたら危険だといつて、友達が注意すると、クルイロフは、いつも暢氣さうに、かう答へるのだつた。「なあに、私はこの額縁が、どんな角度で、どういふ風に落下するか、ちやんと知つてゐるよ。だから私はその角度の外に寢るんだ」と。

誰でも知つてゐるクルイロフの孤獨生活に纏はるたど一ツの浪漫的な色彩は、彼が非常にオレーニナ夫人を賞揚し崇拜し尊敬した一事であらう。オレーニナ夫人は社交界に於ける白木樅の花のやうな魅力をもつた中年の女で、多くの子どもらの母であつたが、彼女の家庭にあつては、クルイロフ、一個の Poronou であり、互に信じ合ふ親友であり、彼女の子どもらに愛せられる人氣作家であり、且つ家族たちの「お爺さん」であつた。クルイロフとオレーニナ夫人の、美しい友情は永年續いた。

ある夏の午後のことである。クルイロフは例の寝椅子に横臥し、小さきピロジユキ（果實入り  
の饅頭）の幻想に耽つてゐた。これは露西亞の有りふれた料理で、料理人はいつも晝食に、ス  
プと共に彼にすゝめるものだったが、時間までに準備がとゞのはない時は、彼の料理人はそれ  
出さなかつた。彼は程なくそれが出来てくれ、ばい、が、と思ひながら料理人を呼んだ。返事は  
なかつた。ピロジユキの幻想は、だん／＼と彼の食慾をつのらせた。彼はいくたびか料理人を呼  
んだ。沈黙が答へるだけで、お人好しの主人公は、料理人の御機嫌に服従せざるを得なかつた。  
料理人は總ての露西亞人の使用人の「クラブ」である庭のベンチに、悠然と腰かけてゐたのであ  
る。彼は最早怖らなくなり、がばと起き上つて、廊下づたひに臺所へ出かけた。そこには二三十  
箇のふくよかなるピロジユキ（果實饅頭）が、鶯鳥の脂のソース鍋の中で、靜かに煮えてゐた。  
クルイロフは先づ一ツを肉叉で刺し取つて口に入れた。續いて二ツ目を取つて食べた。いや、と  
うたう全部腹中におさめてしまつた。彼は大いに満悦をおぼえながら、立ち去つたが、鍋を火に  
かけたまゝで置いたゝめに、鍋の石をこはしてしまひ、己は食ひ過ぎのたゞりで、體をこはして  
しまつた。病氣は、よほど激しかつたと見えて、死ぬのだと思つた。病床にあつて「オレーニナ  
夫人の家へゆき、彼女の理想的な愛情の足下で死にたい」と率直に言つた。「私は貴女の足下で死  
なねばならないと言ひます」と。この話は、彼に關する多くの逸話や傳記にある事實によつて、

證明された彼の性格の著しい姿に、同じく著者をも導いてゆく。それが假令空想にしる、ひとた  
びクルイロフの心に入るならば、彼の性格として、何處までも、彼の望みが遂げられるまでは、  
それに向つて根氣よく突き進むといふことだ。

こゝに於てか、世間が彼を指して安逸懶惰と稱することの、果して妥當であるかが、甚だ疑はし  
くなつて来る。しかも斯うした彼の性癖を示す實例は、擧ぐるに暇がないほど多いのだ。彼が五  
十一歳から五十二歳までの間に、「イツツプ」を原語の希臘語で研究したことなども、その一例だ  
らう。彼は希臘語から單に「イツツプ」を讀まうとしたのではなく、實は友達と約束した賭に、  
勝つのが目的でもあつたのだ。賭け事に勝つことの空想は、彼をして遂に困難な希臘語を、完全  
に修得せしめたのである。賭けに負けて驚いた友達は、彼の堅い寢床の下に澤山の希臘語の書物  
が置かれてあるのを見つけたといふ。因にクルイロフは、賭け事なら賭博までも非常に好きで、  
二十三四歳から三十歳にかけて、殆んど毎日のやうに賭博をやつたといふことだ。正確な年代は  
不明であるが、彼は晩年に及んで、伊太利語を學び、提琴のひき方を學んだ。彼は嘗て印度人の  
奇術師の藝を見て、小さい球を頭の上で圓形をなして投げる技にひどく感嘆したことがあつた。  
それから二週間後、彼の友達が彼の家を訪れたところが、彼は部屋の絨氈の上に、きちんと坐つ  
て、二十箇ばかりの小さい球を、一生懸命に頭の上で圓形に廻しながら、投げ上げてゐたといふ。

彼はまた火事を見にゆくことを、決して怠らなかつた。どんなに暗い真夜中であらうが、どんなに遠い場所であらうが、ひとたび警鐘の音を聞きつけると、いきなり起き上つて、奔馬のやうな凄まじい勢ひで、火事場へ飛んで行つた。少くとも此の意味に於て、彼は斷じて世の怠惰者とは、選を異にしてゐたのである。

かゝる飄逸な性情に關聯して、誰でも彼を暢氣な饒舌家のやうに想像するだらうが、彼は恐ろしく用心深い男で、私的生活にあつては、恰も神経質の外交官のやうに、たゞ獨り黙々として、合點をすれば足りるといふ風であつた。彼の寓話の成功と相並んで、彼が喜んだ世間の尊敬と愛とは得られなかつたけれども、その人格的な事の現示には、全で無關心だつた。一日、彼はオレニナ夫人の家の正餐に招待され、眞青な夜會服を着用に及んで、その象の如き巨軀を、會場へ運んだ。ところが實は、その夜會服は、仕立屋から持つて来たばかりのものを、そのまゝ着用したので、鈕には、全部蓋ひ紙が被さつてゐたのである。會衆は可笑しさをこらへて、わざと見ぬふりをした。それが彼を不氣嫌にした。たゞ一つ彼を喜ばせたのは、虚飾を取り除いた瞬間に過ぎなかつたといふ。嘗てこの人氣作家の七十回誕生祝賀宴會を催した時のこと、オレニナ夫人の夫オレーニン氏は、椅子に凭つてをり、詩人ジュコーフスキーは、三百名出席者の中に立つて、極めて技巧的な雄辯をふるつた。皇帝ニコライ一世の二皇子も、この會を祝賀すべく親しく臨席

してゐた。詩人ヴィアゼムスキー公は自作の祝詩を朗讀した。それは「クルイロフ爺さん」の銀婚式のやうな書き方で、言々句々實に輝かしきばかりに立派な、しかもユウモラスなものであつた。次のやうな一句で結んであつた。

*Zepnbyä eb unroio, merho, Zdpambyj diedymka, Kpiobb j*

彼が最後の病氣に罹る少し前に、二ツのちよつとした事件が起つた。一ツは彼の住居の隣家に火事があつた。人々は直ちにそれを彼に報せに走つた。彼は落ちつき拂つて往來へ出て、恰も美術鑑定家のやうな態度で「これは大したものぢやない。」といつた。今一ツは或る書店から、彼の作品を出版するについて、訂正する處があつたら、訂正してくれといつて、稿本を彼に送つた。

彼は「好きにしてくれ」といつたゞけで、再び顧みなかつたといふ一事だ。

彼の死は七十六歳で、やはり食ひ過ぎが原因だつた。時の皇帝は葬祭料として、一萬ルーブルを下賜された。露西亞の習俗として、もしも誰か希望する者があれば、その人が手づから棺を昇ぎ運ぶのであるが、クルイロフの葬儀に於ては、時の高官たちが、中央會堂から墓地へ棺を運んだのであつた。この詩人に私淑し尊敬する弔問の大群衆は、姪々としてネヴスキー街の大通り三哩に充ちあふれるの盛觀を呈した。寓話作家詩人クルイロフは、眞に温情あふるゝ偉大な祖父であつた。十七世紀露西亞文學の勃興は、ロモノソフに負ふところ大なりと雖も、クルイロフが處



女地なる露西亞に出現するまでは、露西亞文學はまだ竹馬に乗つて歩くにひとしかつたのだ。かくて露西亞文學は彼とジュコーフスキーとに至つて充分に準備され、プウシユキンの種を播いたのであるといつても、不當ではあるまい。

四部合奏 (クルイロフ)

白齒をむき出す猿と片意地な驢馬と

角の長い野羊と足の曲つた愚鈍な熊とが

ある日出會つて相談した

面白い四部合奏をやらうよと

ヴァイオラもヴァイオリンもある

セロも楽譜の本もあるんだ。

場所は皆が集まるあの芝生がいゝねと

この話が纏るまで山路を迂路ついでゐた。

弓があげられた！巧く弾いた。

しかし聞ゆるものは騒がしい音ばかり。

おしまひには猿が焦れて怒鳴りだした

「後生だから一寸やめてくれ

この合奏はちと變だぜ。

君、ヴァイオラ、こゝへ来い

セロは向ふ側へゆけ

おれは指揮者だから

君と向合つてゐる

さあ、今度は大丈夫、巧くいくぞ

おれたちの音楽に、山も森も

たまらなくつて浮かれ出さあね」

銘々はその席について

今一度始めからやり直したが駄目だった！

「止めろ！さあ俺が教へてやる！

俺は眞個のやり方を知つてるんだぞ。

俺のいふ通りにやれば屹と巧くゆく  
さあ一列にならんだ列んだ。よし始める」  
みんなは驢馬の言ふことを聞いて  
一列になつてまた演り直したが  
調子はまるきり合はない。

「一たい何うすれば巧くいくんだ？  
どんな具合に列んで、どうすればいゝのか？」  
みんなが騒がしく怒鳴つて困りはてた。

ところへ一羽の鴛が飛んで来た

みんなは此の有様を打ちあけて語つた。

「どうぞ私たちに教へて下さい  
あなたは御商賣がら巧いんだから  
どうしたら、びつたり調子が合ふのか  
こゝに樂器と樂譜の本があります。

演り方を教へて下さい」

鴛が答へた

「ほんたうの音樂を演るには、ね、  
荒つぽい人たちの持たない才能や  
純な味はひ、手際、耳の修業が要るんです。  
あなた方にそんな資格をもつた人は  
お氣の毒ですが、一人もゐない  
あちこちに坐り直しても、駄目ですよ  
あなた方のお名前は  
音樂家の名簿にのつてはゐないんだから  
とても出来ない相談です」と。

風 (クルイロフ)

雲の真下に一枚の風が翔つてゐた

その高處から見おろして  
谷間の胡蝶にかう言つた

「お前の姿がはつきり見えない  
と言つたら、お前は信じないかね？」

聞かせておくれよ 美しいやん

お前がこの高所まで飛ぶ私を

羨しがつてゐることを！」

胡蝶は答へていつた

「あたしが羨むつて？いゝえ。ちつとも！

威張んなさんなよ。お前さんは

高く飛べるだらうけど、だいたい鎖で

つながれてゐることは否めないでせう。

そんな目標みたいなのが

どうして少しでも楽しからう

あたしの智識から見るとサ。

ところがこのあたしは

さう高くは翔ばないまでも

自由に飛び歩けるもの

少しの束縛もなしによ、

そのうへ、あたしは、人様たちに

ちやほやされたり、騒がれたりして

うるさく世間を渡らうとは思はないんですからね」

アレキサンドル・セルゲヴィッチ・ブウシユキン

クルイロフの時代は、あきらかに露西亞に於ける浪漫主義文學の醞釀期であつた。同時にまた  
パゴヂンやボレヴォイや、ザゴオシユキンやラズネーチニコフなどによつて作られた歴史小説の  
流行時代でもあつた。――(ザゴーシユキンが一八二九年に書いた「ユリ・ミロスラヴスキー」や  
ラズネチニコフ作の「不忠者」「氷の家」は、當時に起つた事件を取扱つた純然たる歴史小説であ  
る)――然しながら、デジュニンはさうした古典文學に大いに反対し、ボレヴォイは浪漫主義思  
潮を排斥した。將に勃興の途上にある浪漫文學に對抗して、偉大な勢力をふるつてゐた、物語作

家といふよりは寓話作家としてのイズマイロフが「善良なる意志」を發行して、獨逸の思想界に打ち建てられた哲學や美學の宣傳をしてゐたのも、この時代であつた。それは露西亞始まつて以來の、賑やかな刊行物を持つた時代であり、次に來るべき詩聖ブウシュキンの時代でもあつた。

私は今、ブウシュキンについて、述べねばならぬところに到達したやうに思ふ。ブウシュキンは一七九九年五月二十六日の莫斯科に生れた。即ち十八世紀最後の年だ。彼の家は舊家で、伯父ワシリールヴォヴィッチは、當時の露西亞社交界や文學者仲間では、詩人として夙に知られてゐる人だつた。彼には二人の兄ゼルギエとワシリイがあつて、この二人とも青年貴族の典型的性格の所有者であり、ブウシュキンは幼少時代から、全で思想が異つてゐた。ブウシュキンの母は、土耳其の首都コンスタンチノーブル駐劄露西亞大使から、ピョートル大帝の膝元へ、食客として送られた一黒人の、その孫娘にあたつてゐる。黒人の名をイブラハム・ペトロヴィッチ・ハンニバルといつた。ブウシュキンの作に成る先祖の回想中に「ピョートル大帝の黒人」とあるのは、この黒人ハンニバルのことだが、アラブではない、純粹の黒人だ。ブウシュキンの容貌が、黒人種のそれに似てゐるのも、かやうな事情によることを言を俵たない。この黒人イブラハム・ハンニバルは、露西亞の宮廷から留學生として、巴里に遣られた。詩聖の祖父（オシブ・ハンニバル）は馬鹿に短急な性癖の黒人で、詩聖の祖母と結婚後、他の露西亞婦人と二重結婚をしたことが發覺

して處罰され、詩聖の祖母との結婚生活は破綻に終つてしまつた。この不幸な祖母こそは、ブウシュキン幼時の唯一人の教育者であり、彼の親身の保護者であつた。といふのは、少年ブウシュキンは非常に陰鬱な氣質の怠け者で、両親からは愚鈍な兒と見られ疎んぜられ、彼に對する親の愛情は、妹のオリガや弟のリヨフに注がれて、殆んど相手にされなかつたばかりか、ある時などは、宗教學校へ放り込まれて、併にされやうとしたこともあつたが、その惨な境遇にある彼を慰めいつくしんだのが、祖母であつたのだ。祖母と同じ味方が、しかし今一人ゐた。それは少年の家の下婢で、マリイナ・ロチオノヴナといふ乳母の役をも勤めた女だつた。下婢マリイナは純露西亞風の温順素朴な優しい性質の女で、一家にとつては無くてならぬ主婦のやうな役目を持つてゐた。マリイナは少年ブウシュキンを我が生みの子のやうに可愛がつた。少年ブウシュキンは彼の祖母に始めて露西亞語を教へられ、嘗て祖母が仕へたことのあるピョートル三世の後で、有名な女傑である女帝カタリナ二世の宮中の話などを、歴史的興味の中に物語つて聞かせられたやうに、下婢マリイナからは、露西亞の昔噺や傳説や民謡などを、繰返し繰返し聞かせられた。下婢マリイナは、さうした物語や小唄に驚くほど精しかつた。少年ブウシュキンが文學に興味を感じ始めたのは、二人の感化であり、少年はこの二人を事のほかに慕つた。少年が親しみを覺えたのは、この二人の女性に限られてゐたのだ。少年は両親の侮蔑の中で育てられた。彼の性格が

急激な變化を現はしたのは、七歳頃からである。陰氣な子どもであつた彼は、就學年齡に達すると共に、太陽の光を浴びた萎びた草のやうに、動作は活潑となり、心は生々<sup>いき</sup>と明るくなつた。家族や両親の驚喜は一通りでなかつた。彼の一言一動は周囲の人々の好奇と注意の焦點となり、この調子で進むならば、或は育て甲斐のある男となるかも知れない、といふやうな希望は、やがて彼を教育しようといふ考へに移つていつた。これまでは見向きもしなかつた父親が、彼の教育といふことになる、別人のやうに熱心に力癪を入れた。貴族風の家柄としては、さきほど富裕でない家庭に、佛蘭西語の教師が雇入れられた。教師は外國人だつた。彼はこの外國人教師に就て佛蘭西語を修めさせられた。だが彼を文學者や詩人にするつもりでない父親は、少年らしい少年になつた彼が、父の書齋に入りびたりになつて、父が讀み古しの佛蘭西文學書類、例へばルウソウやモリエールなどを、夢中になつて貪り讀む傾向を見せて來たことに、苦々しい眼を向けた。それはプウシュキンが十二歳の時であつた。かういふ状態が続いては困ると思つた父は、他の貴族の子弟と同じく、ツアルスコエ・セロに創設されたばかりの、中學程度の學校の寄宿舎に彼を入れた。父はこの少年を、露西亞の外交官に仕上げる目的で、その準備のための第一階段を踏ませたのであつた。ところがこの學校がまた不思議な學校で、三十人足らずの生徒が、朝はおそく起き、夜は深更まで、正規の學課の勉強は打棄て、置いて、放談と飲酒に時を過すのである、な

かには圖書室に入りびたりで、プルタークの英雄傳や、佛蘭西あたりの古典文學に讀み耽る者もあつた。生徒の間には「自由」といふ言葉が流行つた。曰く思想の自由、信仰の自由、政治の自由、言論の自由。この渦の中に捲き込まれた少年プウシュキンは、忽ちにして同輩を抜き、彼等の首領株になつてしまつた。彼が浪漫主義文學の祖、ジュコーフスキーやバツウシュコフやデルジャヴィンや、老歴史家カラムジンを崇拜し、彼等の詩句に倣つて、詩作に没頭し出したのは、確かにこの時分であつて、一方では盛んに、英雄崇拜熱にうかされて、英雄崇拜の論議などを闘はせてゐた。こんな放埒な生徒たちの中心人物となり、尊敬の的となつた彼が、校長や教師たちから、不良性を帯びた生徒として、睨まれたことも、不思議ではない。彼は遂に放校處分をうけやうとしたが、運は、彼を見放さなかつた。一八一四年といへば、莫斯科に破れ、ライプテヒヒに破れ、バリを陥され、ナポレオン一世、エルバ島に流されて、ウイennaに列國會議の開かれた年であるが、歴史の大家カラムジンの主宰する「歐洲新報」に佛蘭西風の詩が、A・H・Kの匿名で掲載された。發表當座は誰の作であるか、わからなかつたが、翌年に至つて、A・H・Kは自分だと名乗つて、今度は堂々たる本名で、再び佛蘭西風の詩を發表し、世間の注目を惹いた者があつた。いふまでもなくプウシュキンだ。當時の首都ベテルスブルグで發行されてゐた新聞は、その數も少く、讀者も貴族か高等官吏か文人に限られてゐたから、たまたますういふ暗馬<sup>ウラハ</sup>が現は

れると、直ちに驚異と怪訝の眼で見られる。ところでその年のことだが、ツアルスコエ・セロの、例の奇妙な貴族子弟の學校で、公開的の學課試験が行はれ、試験場には有名な文學者や文官たちが列席した。その中にデルジャヴィンがゐた。試験はブウシュキンの順番となつて、彼が自作の「ツアルスコエ・セロの印象」を衆客の前で朗讀した。それは此の年頃の少年の作としては、洵に稀有な名文であつた。老詩人デルジャヴィンの注意はブウシュキンに向けられた。老詩人はこの少年の文章を賞嘆措く能はなかつた。少年がそれを朗讀し終るのを待ちかまへたやうに、彼の側に駆け寄つて、彼を抱かうとした。少年は喫驚して校庭へ逃げ出した。しかし彼が日頃から崇拜する老詩人を、自作の文章で感服させたといふ喜びと誇に、少年の胸ははち切れさうだつた。少年は自分の名譽が、この老詩人の口から、文壇へ喧傳されることを、心ひそかに祈つたのである。その熱望は他の方面で達せられた。少年ブウシュキンの詩才は、文部省高等官たちの間の話柄となつた。詩人ヴィアゼムスキー太公などは、この少年の才能には敵はないと言つた。老詩人デルジャヴィンは、この少年を詩人に仕上げては何うか、といふ提議を詩の仲間うちに持ち出したのである。その出發點に於ては、かやうな種類の文人にならうなどいふやうな、明確な考へは持たなかつた少年を、一つは自己の力量とはいふものゝ、詩人たらしむべく、遠近の周圍が作り始めたのである。かやうにしてブウシュキンの名は、文學社會にそろそろ廣まつていつた。文壇が

らは、來るべき詩星の一人として、將來の大成に多大の矚目をうける有様とはなつた。老歴史家カラムジンに親しみ近づいたのもその頃だ。もつとも可なり以前に、カラムジンが莫斯科逗留中、彼の父の家で會つたことはあるが、彼の幼い時のことに過ぎない。ツアルスコエ・セロで二度目に會つた時は、ブウシュキンの文才がカラムジンにも充分認められてゐたので、カラムジンは彼を激勵するために、自著の露西亞史を、彼のために朗讀してやつたりなどした。かやうな環境に置かれた少年は、いよいよ自己の詩的能力の發揚に、一身を委ねようと決意するに至つたのである。この學校に在る間、彼は二百餘篇の抒情詩や希臘風の歌や短詩を作つた。それらは大部分當時の有名な文學者、詩人に宛てて書かれたものであつたが、不幸にして、當時の檢閲官の眼を以てすれば、政治的、道德的に公表を許されぬものばかりであつた。といふのも、この學校に於ける生徒間の空氣が、或は無政府主義的傾向を帯び、或は極端に好色的であり、その中で詠まれたものだから、さういふ傾向の作品となつて、彼の趣味なり思想なり感情なりが表現されたのも、あながち無理のない話であらう。有名な「ルスランとリッドミラ」を作つたのも此の頃（一八一〇）であつた。この長篇の妖奇物語は、彼の學窓生活に於ける一大收穫であると共に、その最後のものではあつたらうと思はれる。「ルスランとリッドミラ」の發表によつて、彼は一躍文壇の寵兒となつた。首都ベテルスブルグは勿論、地方の都會でも、この作品を手に入れる機會のある者は、軍

人、商人、官吏、學生など、上下諸階級を通じて、廣汎に讀まれた。印刷本は瞬く間に部數の不足を告げた。その結果として、一冊の本を筆寫した、いはゆる寫本は甲地から乙地、乙地から丙地へと流布されていつた。これまでの怪奇物語で、露西亞に紹介されたのは、主として西方歐羅巴の所産であつたが、プウシユキンのこの「ルスランとリッドミラ」は、自國內の題材によつて、いはゆる國民的の妖奇物語（傳説史譚の一種）を、新に創造した點でも、少からず歡迎されたい。當時の文壇に於ける作品としては、實際に珍らしかつたに違ひない。この物語の骨子は、魔術師の侏儒が、南露ウクライナのキエフ市の太公ヴラジミルの、一人娘を拉つて、己が不思議の城に閉ぢ籠めて置く。この姫にはルスランといふ婿になる男があつた。但しこの男のほかにも、三人の戀人……といつても、相手から見れば彼女が戀人で、つまりは姫の知らない片戀なのである……その悲しみは一通りではなかつた。三人の自稱戀人たちは、遂に侏儒の魔城へ押しかけて行くことになる。合計四名の勇士の冒險活躍、リッドミラの幽閉、ルスランの勝利、これを巧に組合せたものだが、作者が題材の扱ひ方と、技巧の魅力とは、従來の物語に比ぶれば、眞に夏の朝露春曉の微風のやうに、清新な感覺と爽快な感情を、讀者の心に湧き起したのである。しかしながら物語の主潮として、全篇に流れてゐるものは、何であつたかといへば、作者自らも恐らく意識しなかつたに違ひない「自然的」な要素であつた。「自然的」はまた「素朴」とか「無飾」とか

「單純」とかの言葉に置換えられる。洵に露西亞人は此の意味に於ける「自然的」なもの、所有者ではないのか？露西亞の物語類には、頗る突然な、突飛しかも何の文なくして、男女相識り、相戀することが頻繁に描かれてゐる。それは彼等の「自然的」な心を識る者の、誰もが怪しまぬところだ。プウシユキンもかゝる民族の一人であつた。讀者も亦然りで、彼等は「自然的」であることを愛する。プウシユキンにより、「ルスランとリッドミラ」によつて、それを具體的に示されるまでは、全然意識しなかつたも同然であつた。彼等の心中から、かういふ思想、感情の脈を攫み出して見せたのが「ルスランとリッドミラ」である。彼等が歡喜の源を明示したのである。「寫實」といふ熟語は、露西亞文學の辭典にはなかつた。この時に於ても、作者や讀者や、當時の街學的文學者たちは、「ルスランとリッドミラ」一篇によつて、近世露西亞文學の動が基礎石が置かれた事實を、認識し得なかつた。作者プウシユキンすら、かゝる大事業を企てるつもりではなかつたし、作品の成功や功績については、物語の珍奇さが、世の絶大な評價を呼んだのである。しかし思はなかつた。當時の露西亞にあつた二つの文學黨派——一つは擬古文學派で、一つはジュコーフスキーの代表する浪漫文學派——は、争つて「ルスランとリッドミラ」の派別を論じあつた。これは何方の黨派に歸屬すべきものであるか、といふ討論は文壇に噴すしく、詩といふものゝ、綺羅びやかさを持たない、これに詩の資格があるだらうか、といふやうな説が、擬古派の

詩人たちの間に起つた。「ルスタンとリッドミラ」に對する非難排斥の聲は、彼等擬古派の間から湧き上つた。攻撃の要點を擧ぐるならば「ルスタンが大男の鼻の孔の中へ、槍をふりかざして飛び込んで行く、とか、鼻の下に突つ立つた、とか、大男の髪の毛につかまつて宙にぶら下つたなどいふのが、我々の持つてゐる今日の新しい詩であらうか？それは詩といへるだらうか？」といつた調子である。プウシュキンは一言の答辯も反駁も敢て試みなかつた。かういふ旋風が卷起つてゐる最中に、彼は突然に全く別の方角へ駈け出した。このことが彼の藝術に、どんな影響と結果を與へるかといふことには無頓着で、何の顧慮もなく、彼の最も親しい友達によつて組織されてゐる社會改革結社の、眞中に飛び込んだのであつた。

これは彼の詩「自由を歌ひて」の中に見ることが出来る。これに先立つ一八一七年、例の「奇妙な學校」を卒業したプウシュキンは、近衛聯隊に入營してゐたので、その詩才に秀でゝゐるやうに、武術にかけても得意の技を持つてゐた。馬術、射撃、水泳、角力には自信があつた。これがあの少年だつたのか、と驚かれるほど強壯な體になつてゐた。社會改革者らの結社に入つたのは、除隊後間もなくのこと、この結社は、カラムジンやジュコーフスキーなどの文學團體によつて組織され、シンコフの傳統主義とは正反對の文化運動——この結社にも彼は加盟してゐたが——以外に、純然たる政治改革を目標として、この方面に活動する熱情家たちが、祕密に組織し

てゐるところの、専制君主制や官吏の專横に對して、大きな改革を敢行すべく熱狂してゐた青年たちには、その行動から見れば、いかにも淺慮であり、やり過ぎる傾向の危険な政治聯盟であつた。(エ・ゼ・サック著「露西亞主義運動史」を参照されたい)この祕密結社の中には、ジュコーフスキーやカラムジンが始め稱へた「自由の保護」の、感化を受けた若い學生たちのほかに、中心人物としてムラビョーフやクレイエフ、ベスツイジェフ・フリッミンやベステルなどの急進主義者がつて、そこへプウシュキンの名が一つ加はつたのである。プウシュキンは祕密結社に加盟した噂は官邊の探知するところとなり、祕かに革命運動の一翼をつとめてゐるといふ報道は、皇帝アレキサンドル一世の耳にまで達した。それから間もなく、次々に發表される彼の諷刺作品と共に、彼は最も危険な人物として黒表の上に特記され、やがて皇帝の激怒となり、詩人のシベリヤ流刑の決定となつた。元氣だつた彼は、俄かに驚き恐れ、愛護者カラムジンに赦免を乞ふてくれと哀願窮訴した。彼を愛する老歴史家は、彼の乞ひを容れて、皇帝に謁し、プウシュキンに對する特別寛大の處分を願ひ出た。「プウシュキンは露西亞文學の誇りである」からといふことを理由に、執拗に寛恕を請ふたのであるが、偉大なる老歴史家の聲望を以てしても、皇帝の怒りを和らげるには足りなかつた。辛うじてシベリヤ流刑は免かれたが、向後一ケ年間は、筆舌共に沈黙を守るべしといふ嚴重な條件の下に南部露西亞へ一小官吏として、追放されてしまつた。流石



のプウシュキンも悲嘆にくれたといふことである。彼は悲痛の心を抱いて旅立たねばならなかつた。彼が孤影悄然と辿り着いたのはエカテノスラブで、到着匆々烈しい感胃に罹り、既に一命も危く見えたが、折しもコウカサスの陸軍總司令官として赴任の途上にあるラエヴスキー將軍が、プウシュキンの寓居を訪れたのである。ツアルスコエ・セロ時代の學友の、將軍は父だつた。將軍はプウシュキンの窮狀と病態に驚いて、自分の邸に彼を引取つた。邸はカメンカ丘上にあつた。將運命は不思議だ。後日、プウシュキンが決闘に斃れたときに、民衆を煽動したといふ理由で、同じくこのコウカサスへ流刑に處せられた詩人レルモンツフが、風光明媚のコウカシア山水に懣惑されたやうに、レルモンツフの先輩プウシュキンもまた、コウカサスの風物に魅了され、これによつて受けた精神上の感化は大きかつた。加之彼を優遇してくれたラエヴスキー將軍の家族は、バイロン崇拜家のお揃ひであつたので、プウシュキンもまた遂にバイロンの愛讀者となり、やがて熱烈な信徒となつてしまつた。この時代の全歐文壇に大名鼎鼎しく、近世文學史に著しき感化を與へた英詩人バイロンの、不羈放逸な英雄的性格と、プウシュキンの性格とは、端なくも雲深き山溪の間で、びつたり行き合つたのである。プウシュキンの氣質の中に、漸く形づくられてゐた厭人癖や、傳統破壊や個人主義（實は自尊主義）的思想傾向は、次第に高潮して來た。彼の内部、外部生活は一般人のそれと異つて來た。人々は彼を指して反基督教徒といつた。彼が日常の

言行や、特異な政治思想や哲學の方面だけではなく、その生活様式の全體が、妙に幻想的色彩に包まれてゐたからでもあらうが、當時の嚴格な希臘オルソドクス教徒から見れば、洵に反基督教徒のやうな惡魔的な仕事に従事したり、決闘を好んだり、萬事さういふ氣風が濃厚にあらはれてゐたからでもある。そのために彼はベッサラビヤのキシニエフ市へ轉任を餘儀なくされた。そこは希臘人、モルダヴィヤ人、土耳古人、伊太利人が群居する南露の町である。町全體が異國情緒の藪である。詩人の觀察が新奇の何ものかを發見したことは疑ひを容れない。彼の作「パフチサライの泉」にはそれが浮き出てゐる。もとより囚人として、この南國に追ひ遣られたのではないのだから、生活は自由だつた。彼は南方人種の群に投じて、不道德な日を送る日が多かつた。こゝで染みついた飲酒、賭博、遊蕩の惡癖は、後日ベテルスブルグに於ける彼を、破滅の淵に墮落さうとしたほどで、一八二二年の秋には、市者のと猛烈な喧嘩をして、隣り市オデッサへまた轉任を命ぜられた。キシネフ市を立退いたプウシュキンは、その途すがらツイガンの群に投じた。ツイガンとは旅から旅を漂ひわたる流浪者たちで、占者、音樂師、藝人、鑄掛屋、乞食の一隊だ。その仲間に入つて、プウシュキンは流浪の旅をつゞけた。彼の作「ツイガン」の主人公アレコといふ厭人癖の男は、このときの彼自信である。やがて彼は黒海の港市オデッサに着いた。オデッサの長官は恐ろしい武斷的人物であつて、プウシュキンにとつては鬼門だつた。長官はプウシュ

キンを一個の貧弱な下級役人として扱ひ、流滴地に於ける有名な詩人としての待遇はおろか、紳士の數にも入れず、完全に酷使した。プウシュキンにとつては、悲觀すべき地獄の市だつたが、ふとした機會で、一人の英吉利西人と知り會ひ、この人からセレーの詩集を借り受けて、その編讀をせめてもの慰安とした。彼がセレーの作品に接したのは、これが最初だつた。セレーの作品は、崩壊しつゝあつた彼の信仰を一氣に押し倒して、非宗教的に誘導し、彼の國家觀念を冷却せしめた。オデッサに於て彼が表面に現はした非國家的の有害危険な言論は、中央政府をして彼に對する憎惡を、一層深めた。彼はいつしか、シベリヤ流刑免赦條件を忘却してゐたのである。恐るべきセレーの力だ。一八二四年、彼はブスコフ政廳管下のミハイロフスキーに遣られた。こゝには彼の父が所有する土地家屋があつた。その一つに彼は住居を定めた。

言葉を封ぜられたプウシュキンの生活には、神祕的な思索と絶えざる冥想と讀書とがあるだけだ。その思索と沈黙の裡に、彼は従前よりも深い、新らしい、成熟した人生の一角へ、突き入らうとした。彼の讀書には、バイロンの感化と同じやうに、大き強い力をセイクスピアにも見出したのであつた。寓居に於ける一切の生活は、彼の傑作「エヴゲニエ・オニエギン」の、第四章にあらはれてゐる。それは此のミハイロフスキーに於ける彼自身をモデルにしたので、この謫居にあつて、彼は十數年の昔に溯る經驗を繰り返してゐたのだ。といふのは、生みの母のやうに彼が

なづき慕つた忠實な下婢マリナ・ロチオノワが、再び彼唯一の話相手になつたからである。

プウシュキンの一生を大別すれば、生れてから現在までと、今後の生活の二つになる。プウシュキンの生涯に於ける、最も重大な轉換期は此處にあるのだ。彼は毎日の憂鬱を、下婢マリナ・ロチオノワによつて慰め癒やされた。昔に還つた心地で、彼はこの温良な女性の口から、昔噺や民話の總ざらひをして聞かされ、自らも進んで傾聴した。少年時代の性格の急激な變化は、又もや此處で繰り返されたやうだ。不思議な現象である。長いあいだ彼が心酔し傾倒して來た外國の情趣を、俄かに嫌ひ出した。これまで住んでゐた心の世界から逃げ出して、今の時代の明確な空氣に浸らうと努めた。彼の住居に近くトリゴフスキーといふ淋しい町があり、オシツポフといふ人の、純粹な露西亞趣味を尊重し、この趣味の中に生活を營む素朴な知識階級に屬する家族が住んでゐた。それは當時の露西亞人としては、模範的な教養のある家族であつた。プウシュキンは此の家の主人と近づきになり、この人の娘達とも交際するやうになつた。この家族との往來もまたプウシュキンの心中に復活して來た純露西亞趣味の高潮を助長したと思はれる。傑作「エヴゲニエ・オニエギン」に登場する女主人公は、この家族の娘たちがモデルになつてゐるのだ。プウシュキンの藝術は、このオシツポフ一家の趣味によつて、いつしか露西亞風に導かれていつたが、この心的轉化——急進的社會思想や自由の保護運動——から脱却し去つて、生國昔ながらの傳統、

風習に隠れた彼に、文學上の使命を存続する野心と、創作の發表慾と、現在に至るまでの名聲を保持して行きたい願望とが勃然として燃え上つて來た。同時に此の狹隘な田舎町に籠居してゐることが苦痛になり出した。彼は然るべき都會での華々しい活動を、夜毎の夢にまで見るのであつたが、たまたまトリゴウスキーの者が、聖ペテルスベルグ市からやつて來て、プウシュキンに取つては、全く驚くべき消息を齎らした。それはプウシュキンが仲間の一人になつて、革命運動にあづかつてゐた、といふことになつてゐる秘密結社（これがいはゆる十二月黨だ）の革命騒動の話である。彼はこの騒動のために、街道は兵隊に遮断され、危険を冒して漸く此の町に辿りついたのであるといふ。話を聞いたプウシュキンは、嘗て彼等黨員と生死を誓ひながら、事を共にしない自分を、一度は悔ひ、躊躇つて冷靜に考ふれば、彼等の仲間を離れたことが、彼本來の使命からいふと、實に有難いことに思はれたのである。間もなく十二月黨首領や黨員の捕縛、計畫の失敗などが、この田舎町にも傳はつた。この事件と前後して、プウシュキンの進むべき新路が、自然に開かれる時が來てゐたのであつた。彼は十二月黨員との間に往復した、改革運動に關する文書類を焼き棄てた。彼は己の罪過の再び蒸し返されることを恐れた。折から彼の書室にマリイナ・ロヂオノーフが入り來つて、門前に官廷の使臣を乗せたモスクワ警察署の旅行馬車が停つたことを告げた。プウシュキンは不安の心を押へながら、玄關に出て見た。瞬間、モスクワ警察署派

遣巡查は、プウシュキンに向ひ、何の説明をも與へずして、彼を旅行馬車の中に投げ込み、莫斯科として馬に鞭打ち去つたのである。しかしプウシュキンの恐怖は、彼がクレムリン宮殿に送り込まれた時に、始めて餘計なものだつたことが解つた。心配するには及ばなかつたのだ。十二月黨革命騒ぎの最中（一八二四年十二月十四日）に即位したニコライ一世が、プウシュキンを謁見するため、それは當時の露西亞官憲が用ゐる常用手段であることが判明したのである。皇帝がプウシュキンを引見したのは、十二月黨事件に關する穩やかな訊問を行ひ、今後彼の行動についての親切的な注意を與へるためであり、これを機に彼の流刑の赦免を中渡すためであつた。プウシュキンは謹んで恭順の意を表した。皇帝は將來に於ける彼の作品は、皇帝自ら檢閲にあたることを言渡した。寛大な恩典に感泣したプウシュキンは、彼を詩人として遇する皇帝のためには、身命を棄て、奉公することを誓ひ、且つ己もさう決心したのであつた。處刑前のプウシュキンと、現在の彼とは別人の觀があるではないか。しかしながらプウシュキンに對する寛容は、たゞ皇帝ニコライ一世だけの好意から出たもので、一度身についた汚點は、到底拂拭し去ることの不可能を、彼は間もなく覺つた。彼が再び元の世界に立ち還ることの出來たのを喜んで發表した創作に對しては、そこに皇帝の好意を前提としても、警視總監たるベッケンドルフ伯爵の、恐ろしき制肘と壓迫の加はることを、彼は發見した。ベッケンドルフ伯爵は以前同様の疑ひと憎しみをもつて、

彼の作品に臨み、苛酷に検閲した。それは詩人や文學者が、一度は必ず経験しなければならぬ壓迫と警戒と監視とを、實生活の上にも感ずるやうになつたのである。

一八二七年、ニコライ一世の許諾を得て「毒の木」「スタンザ」「エヴゲニエ・オニエギン」「ステンカ・ラージン」を作つたが、最後の二篇はベッケンドルフ伯爵の名によつて、紙上發表を禁ぜられた。この二篇は宗教、道徳の上から公表を許すわけにはいかない。この二篇は藝術品としても、決して優秀なものではない。これは佛蘭西藝術の模倣に過ぎない、といふのが發禁の理由である。ベッケンドルフ伯爵の壓迫は、明るくなりかけてゐた詩人の性格に暗影を投げかけ、甚だしく神経質にした。彼は不安に襲はれた。生活の規則的歩調は、しどろもどろに亂れ出した。彼は憂鬱を追ひ遣るために再び遊蕩を始めた。間もなく田舎に引込んで「狡い騎士」や「ドン・ジュアン」や「ポルタワ」などの短篇を作り、その期間にゴンチャレフといふ人物と知合ひ、ゴンチャレフの娘とも親しくなつた。プウシュキンの戀の相手が、この娘なのである。一八三一年莫斯科に於て、彼は此の娘と結婚式を挙げた。この結婚は彼の運命を決定した。稀に見る美貌の娘と結婚したお蔭で、彼は壽命を縮めたのだ。ツアルスコエ・セロに於ける新婚者の作品は、新らしい氣分のなかに「ツアル・サルタン物語」や「僧オストロフ物語」が發表されたが、それは從來の讀者の期待に背くものばかりたつた。検閲當局の意向を氣にして、發表不許可、沒收を恐れ

るのあまり、官吏や政府に妥協し且つ諂ふところが、讀者に不愉快を感ぜしめたのであらうが、これによつて地位の安全と物質上の利益は、プウシュキンのために、保證されたであらう。詩人の態度が官邊尊重に變つてゆくのを認めた宮廷では、詩人の懐柔策として、外務省の一椅子を彼に與へ、五千留の年俸を給して、多少優遇した。彼に詩材を提供する意味で、宮中の記録所調査の自由を與へ、旁々ピートル大帝の事蹟を綴録させる目的で、暗にそれを懲慝した。翌年、「プガチェフの叛亂」「ルウサルカ」「ドウプロヴスキー」が完成した。政府に對する詩人の妥協は、熱烈な彼の一般讀者の減少と離反を意味する。プウシュキンの考へでは、官界と民衆の双方に、己が勢力を布殖し、感化を與へるつもりだつたのが、二兎を追ふ者の失敗を招いた形で、彼の苦悶はその作「民衆へ」に、明らかに現はれてゐる。彼の知的生活は頂點に達せんとしてゐた。

「この地上に幸福といふものはない、とすれば、せめては平和と自由はあるだらう」と彼は叫んだ。かういふ考へに到着するほど、その頃の彼の心は、悲惨な状態にあつた。

「世の中は厭な泥沼みたやうなものだ」とも彼はいつた。世の中は苦惱と不愉快の坩堝となつた。そこに住むのは堪えがたい。この悲觀のなかに、突如として起つた事件がある。プウシュキンの最期はそろそろ近づいて來た。警視總監ベッケンドルフと詩人は、依然として睨み合つてゐたが、詩人の失態を見つげ次第に、致命的の打撃を喰はせてやらうと、執拗に狙つてゐた伯爵

の姦計に、詩人はうかうかと乗せられてしまつたのである。プウシュキンの家へ幾通かの匿名の手紙が舞ひ込んだ。その手紙には、その頃、貴族社交界の花形であつた、彼の美しき妻が、年若き守衛ヘッケレン・ダンテール伯と、密通してゐるといふことが書かれてゐた。これらの密告書は、プウシュキンを惱亂させた。しかし彼は妻の潔白を信じて疑はなかつた。しかも憎むべき噂は、風に乗つて四方へ廣がつた。彼の妻は噂の無根を明らかにして、田舎に引込むことを彼に勧めた。彼は聞き容れなかつた。紳士の名譽と體面を高く保つためには、ダンテール伯爵に決闘を挑まねばならない。彼は遂に我を忘れて逆上した。企まれた陷穽に飛び込んだのである。一八三七年一月二十七日に、プウシュキンはダンテール伯爵とピストルで決闘した。決闘の場所聖ペテルスブルグ郊外と時刻とが、ベッケンドルフ伯爵の耳に入つた時に、決闘をやめさせねばならぬ職責の彼は、巡査數名を急派したが、巡査が駆けつけたのは、決闘場とは正反對の方角であつた。決闘は終つた。プウシュキンはダンテール伯のピストルで、致命傷を受け、聖ペテルスブルグの彼の家に擔ぎ込まれた。命の灯の消えなむとしてゐるなかで、彼は妻の將來を案じ苦しんだ。プウシュキン危篤の報はニコライ一世の耳に達した。皇帝は使臣を遣はして、詩人の心をやすめるために、彼の遺族の生活その他のことは、皇帝が面倒を見てやるといふやうなことを告げた。彼はかすかな微笑をうかべながら頷いた。枕頭には彼の數多き著書が列べられ、彼の妻やジュコーフス

キーが彼の臨終を見守つた。家外には往來を遮斷するばかりの群衆が、彼の容態の經過を知らうとして集つてゐた。かくて二日間の苦しみその後には彼は死んだ。彼の死は民衆に大衝撃を與へた。民衆は彼の死によつて、露西亞は大なる國家的損失を蒙つたことに、はじめて氣がついたやうであつた。民衆は不幸な決闘の真相を知つて騒ぎ出した。この騒ぎの真中に飛び込んで、狂騰せる民衆を煽動した者がある。煽動者はプウシュキンの死を哀悼するの一文を草して、巷に撒き散らした。民衆はこの煽動者に導かれて、ある種の危険な行動をとらうとしたが、煽動者が捕はれてコウカサスに送られたために、辛うじて事なきを得た。煽動者といふは、後の有名な詩人ユリエヴィッチ・レルモンツフその人である。プウシュキンの人としての缺點、その臨機應變主義、民衆と政府に秋波を送つた晩年、このやうな詩人に對する民衆の面白からぬ感情も、彼の傷ましき死によつて、洗ひ流されてしまつた。民衆の心は、彼の死に對する悲哀と、その功績に對する讚仰で満たされた。各階級の人々は、偉大な詩人の死を弔ふために、いろいろの計畫を立てたが、政府に干渉されて事止んだ。プウシュキンに對する官憲の憎悪と敵性とは、彼の墓場にまでつき纏つた。官憲は民衆の示威運動を恐れて、夜中ひそかに彼の遺骸を、嚴重な警護のもとに、スツイヤトゴール・ウスペンスキー寺領の墓地へ運び去つた。そこには彼の母が眠つてゐた。

黒い肩掛 (モルダヴィヤの唄)

黒い肩掛けを見ると

私は感覚を奪ひ取られたやうになつて  
戦く心は恐ろしい絶望に苦しめられる。

物事を輕信する青春の夢に溺れてゐる時  
私は情熱と眞心の希臘乙女を熱愛した。

希臘乙女は温順しくて

可愛らしく美しかったが

私の歡びは忽ち絶望の日に入つてしまつた。

ある日、私は愉快な友と祝宴を催してゐた  
が宴終らぬうちに

呪ひの猶太人が部屋の扉を軽く叩きに來た。

「あなたは物狂はしい歡樂の渦の中で  
笑ひさどめいてゐらッしやるが」と彼、私に囁いていふ「あなたの希臘娘は、あなたを裏切つ  
てゐますぞ。」

私は猶太人を咒ひながらも、密告の報酬に  
金貨をくれてやり

私の最も信用の置ける奴隷として  
この男を仲間に入れてやつた。

私は自分の駿馬に跨るや否や  
仲間にも別れをつけた

心の奥底には哀悼の聲が低く彷彿してゐた。

希臘乙女の住む家は

やつとこのことで見つかった  
なぜかといへば

私の足は洞へ眼は眩んでゐたからだ。

その時既に私は、乙女が顔を隠さうとした  
黒い肩掛けを奪ひ取り引裂き  
血の滴る刃を拭いて、急ぎ立ち去りつゝあつたのだ。

夕霧陰氣に湧きあがり

例の奴隷奴が二つの死骸を

ダニウブの激流に投げ込んだのである。

あの魅力ある眼は、それつきり

二度と再び私を歡ばせるために

現はれることはなかつた。

それつきり

私は夜間に祝宴をひらくことを廢めてしまった。

黒い肩掛を見ると

私は感覺を奪ひ取られたやうになつて

戦く心は絶望に苦しめられるのだ。

#### 「エヴゲニエ・オニエギン」の梗概

エヴゲニエ・オニエギンといふ紳士があつた。オニエギンは佛蘭西流の學問と教育をうけた、稀に見る人物であつた。彼は露西亞人でありながら、露西亞流の教養や趣味は、全で持合せないパイロン宗の信徒であつた。彼はその日夜を、社交俱樂部や假面舞踏會で過してゐた。社交界や貴族仲間では、彼が學問上の造詣は光りを放つてゐた。しかし彼は遂にかやうな社會の空氣に倦いてしまった。彼は差迫る財産の整理に故山へ歸り、しばらくの間、田園生活を送つては見たが、何事にも何物にも魅了され得ない彼の飽きつばい性質は、單調な田園生活にも、興味を失つてし

まつた。たまたま隣家にレンスキーといふ青年詩人が住んでゐた。青年詩人はオニエギンとは異つて、なかなかの熱情家だつた。レンスキーは獨逸で教育を受けて歸つた、シルレルやカントの崇拜家だつた。優しき浪漫派だつた。感情家だつた。オニエギンはこの青年詩人と知合ひ、お互にその内部生活に缺如してゐるものを、充し合ひつゝ、親交を深めていつた。レンスキーとの交りによつて、オニエギンは行き詰つてゐる心的轉換が出来ることを喜んだ。レンスキーはまた隣人オニエギンに、心の幸福を與へ得る意識を楽しむ詩人らしい善人だつた。兩人の交誼深まりゆく一日、青年詩人レンスキーは、近くに住むラーリン家に、オニエギンをつれて行つた。ラーリン家には年頃の娘が二人ゐた。姉をタチアナ、妹をオリガといつた。姉タチアナは純粹な農民の娘に見るやうな、純情無垢の、あまり教養のない、しかし非常に空想的な、引ツ込み思案の無口屋だつた。彼女の周囲の人々からは「おかしな娘」に見られてゐたが、彼女自身はさういふ誤解から通れて、何處かに自由な生活を創造したい願望に燃えてゐた。ツルゲーニエフの「サーシア」にそっくりの露西亞的農園の女性である。彼女は幼い時から乳母フィリビエヅナに育てられ、乳母の口から露西亞の傳説やお伽噺などを聞かされて成長した正教の信心家ではあるが、露西亞農民の娘によくある、超自然の世界をも信じ、かやうな奇異な世界に憧れてゐる、いはゞ露西亞の處女の大部分が背負ふてゐる運命の標本ともいふべき、古風な量見の娘であつた。この娘を育

て上げた乳母との問答。

娘「お前が若い時分の戀なんて、どんな風だつたかえ？」

乳母「まあ！お嬢さま！そんな大それた事をしませうもんなら、わたくし、繼母からね、地球の外へ拂ひ落されてしまひますよ！」

といつた風の、乳母は保守黨であつた。タチアナは十七歳である。これと對象的に妹オリガは頗る快活な女學生だつた。「あツさりした水平線に浮び出た、あツさりした月」のやうな容貌の處女だが、姉ほど美しくはなかつた。快樂主義とか實際趣味とか、臨機應變主義とか、さうした明快な功利的な性格を、一纏めに言ひ表はす言葉があるならば、その言葉を被せるに最も適當な、當時の露西亞女學生氣質の代辯者が、妹オリガであつた。レンスキーの紹介で、オニエギンはこの姉妹にも親しい交りを結ぶやうになつた。オニエギンのやうな學問知識のある都會の紳士が、こんな淋しい田舎に来てゐることに、好奇的な心の動搖を感じたのが、むつり屋のタチアナで、終には彼に想ひをかけるやうになつた。いぢらしくも内氣な戀の芽生えだ。彼女は心をこめて書き綴つた手紙を「無分別にも」オニエギンに送つたのである。その懸想文の一部を抄譯して、ここに挿入しよう。むろん詩の體である。

私が始めて貴男を見ましたときに、私は



私の平和をしつかと守つてゐました。それは眞實のことです。

私の恥かしさが、どんなことがあつても、貴男へは見えないやうに

一生の運命が、たゞ希望の閃めきにそゝのかされて、

貴男がおいでになつて

私たちの田舎の家で、私たちと會ふために、時々私に

貴男のお言葉の一ふし一聲を捉えるために、たゞ一人、生き長らへて夢見る

次にまた會ふ日までを、夜となく晝となく、でも、私、何の希望もないやうに思はれますわ。

私たちが粗野な沈黙屋ですから、貴男はもう飽き飽きなすつたのでせうね

みんなが、さういひますのよ。貴男は人間がお嫌ひな性分ですつて

私たちは——見世物ではないのですけど——世間知らずだと思ひなすつたことでせうね。

何故あなたは私たちをお訪ねなすつたのですか

この世の中から忘れられた淋しい場所に？

私はこんなに悶へなくても濟んだでせうに

あなたのお顔を見なかつたら。

何にも知らない私の心は

もう夙から、こんなに懶い生活に乗てゐたのでした。

未來の年月は、私に

ちがつて、愛を與へに來てゐるのでした

私の運命、ほかでもない

尊い母といふこと、眞實の妻といふことなのです。

他人の！いゝえ。この地上の誰にも

私は自分の心をゆるしたことはありません。

あの「最も高いお方」のお定めによつて

天帝の御心によつて、私は貴男のものです。

私は貴男にあてがはれました

私が生れ落ちるときから既に

私の未來の運命に忠實に従つて

神様は、私はちゃんと知つてますわ、貴男をこゝに導き送つて私の夫、私の味方になさうとしたのです私の墓石が私の體を蔽ひかくすまで――

.....

私の夢の中に、貴男は屢々現はれましただから私は、貴男を此處で、はつきりと見る日の前々から、私は貴男を愛してゐたに違ひない。貴男の不思議な凝視の底に、私は萎んでしまひさう。貴男のお聲は私の心に鳴り響きます

長い間――それは決して夢ではありませんでした！

あなたはお見えなさいました――私は直ぐに悟りました

この私の血の中に起つた不意の騒ぎを。

そのとき私の想ひは囁きました――「まあ、このお方だわ！」

これが眞實ではないのでせうか？確かにさうではないのでせうか

あなたが平和の「時」に、私に話しかけなすつたといふことが

私が哀れな靈をたづねて行つたときでなければ、揺り動かされた私の魂の痛みを鎮めるために祈らうと努めてゐた時に。

.....

あなたのお姿が現はれなかつたといふのでせうか

優しい幻影となつて――早く失せ過ぎてしまつても――私の陰鬱な心を明るくするには？私の

この眼で

あなたが私の寢臺の上に、靜かに横たはつてゐらっしゃるのを、見なかつたでせうか？

戀と希望の

低い言葉が囁かれなかつたでせうか？今度、あなたは何んな姿に化けて

いらっしゃるでせう？善良な守護の天使としてでせうか

それとも計略の多い心を持つた誘惑者としてでせうか？

どうぞ聞かせて下さい。私の疑惑をのぞいて下さい！

どんなに好くつても、それはみんな

空つぽの夢になつて

泡沫よりも軽く

これで苦しんだことのない單純な心の？

ええ。ええ。それでも結構ですわ！でもこの先、

私は運命を、あなたに任せなければならぬんですもの。

あなたの足もとに泣きくづれて涙をこぼし

私を被護つて下さる愛情に、たよらなければならぬんですもの。

私の姿を胸に描いて下さいませ——私はたつた一人坐つてゐますのよ。

私の苦しみを察してくれる人もなくて——もう今は私の理性も減びてしまひました！

私は貴男を待ち侘びてゐます。あなたを一目でも見て

新しい希望に心を甦へらせるか

それともまた虚い夢が戻つて来るか

誘惑の餌に——あゝ！

.....

タチアナは戀のためには、身も世も棄てる娘ではあつたが、一面には世俗的な名譽心から、思ひ切つて手紙を届けるまでは、幾度躊躇したか知れなかつた。しかも此の手紙を受取つた紳士オ

ニエギンは、タチアナを失望の谷底へ突落してしまつたのだ！ 輕卒とか浮薄とか、向ふ見ずとか、大嫌ひのオニエギンは、この懸想文を読むと、彼女に對する今までの親しみや愛情を失つてしまつた。タチアナの戀文に現はれてゐる彼への戀着の動機や、戀ひ慕ふことのいかに恥かしいかといふことについては、全然理解し得なかつた。オニエギンは乙女心の微妙さを知ることが出来なかつた。彼にはこの純情一途の田舎娘が、たゞもう無趣味な無作法な、爛佳な奥床しさのない粗野な女としか見えなかつた。彼は無情な返事をしたため、その中に嘲笑と皮肉をさへ書き含めて、彼女に送つたのである。タチアナは切ない胸の想を、無下に拒ねつけられて、がっかりしたものの、オニエギンを戀ひ慕ふ心は愈々燃えさかつた。何が故にオニエギンは、かやうに冷かな返事を寄越したのだらうか、と彼女は考へた。そこで彼女はオニエギンの人物や性格を、充分に呑み込まねばならないと考へて、彼が崇拜するバイロンの作品を読み始めたが、彼女にはバイロン主義が、どういふものであるか、理解することが出来なかつた。彼女がオニエギンを戀ふことの烈しく強ければ強いほど、オニエギンは彼女から遠ざかり、しかも妹オリガに近づき、折を見ては、戯れ口説くのであつた。何ぞ知らんや、妹オリガには戀人があらうとは。それは青年詩人レンスキーだつた。レンスキーとオリガとは既に許婚の仲だつた。そのオリガと戯れることは、オニエギン自身も、決して善いことゝは考へなかつたが、自己本意の惡趣味を満足するため

には、彼らしくもない不徳義な振舞ひをやめなかつた。またオリガの方でも、いやに生真面目なレンスキーとは性が合はない。田舎の生活にも懐かないので、オニエギンに新奇な魅力を感じる。この有様にレンスキーは憤激した。青年詩人の人格は不幸にして、鍛錬が足りなかつた。彼の感情は自然の儘だつた。自己制御の力に缺けてゐた。レンスキーの嫉妬は恐ろしかつた。その結果はおきまりの決闘である。この場合、當時の露西亞の習俗として決闘のほかはなかつた。哀れなレンスキーは、かくてオニエギンのピストルの弾丸に斃れたのである。その決闘の場面を原作。「エヴゲニエ・オニエギン」の中から抄出して見よう。

彼は武器を提げて彼の敵を狙つた

今や運命を決する審判者の九歩は數へられて——打ち顛ふレンスキーは

左の眼を閉ぢ狙ひを定めた——その瞬間オニエギンの拇指は拳銃の引金を壓した

砂漏は轉倒した！レンスキーは溜息を吐いた

たゞそれだけだ！さうして拳銃を取り落した。(第三十節後部)

彼は體を鉤のやうに曲つた指で撫で廻した。彼は打倒れ顔は蒼暗くなり、やがて動かなくなつた。その姿は死を告げてゐた。苦悶もなく折しも東の方、丘の上のすべては

朝の光に閃めき

雪に包まれた景色は消えて見えなくなり

オニエギンは忽ち恐怖の悪寒に襲はれた

彼の射撃の手應への

あつたことがわかつたのに。

彼は急いでいつた、詩人の屍のそばへ。

そこに立ち窺ながら、彼の名を呼んだが——もう遅すぎた！

彼はすでに死んでゐた——時ならぬ運命！

花は暴風雨に散つたのだ

破れた豎琴の音のやうに

祭壇石の上には 火！(第三十一節)

(女性が原因の決闘で、青年詩人を射殺した作者プウシキン自身が、女性が原因の決闘で、射ち殺されたのも、恐ろしい因縁ではないか！)

オニエギンはあるほど仲のよかつたレンスキーを射殺した。彼は心の底から後悔した。良心の苛責は激しかつた。その苦痛から脱れるためにも、村から逃げ出したが、一方、妹娘のオリガは、

レンスキーが死の當座こそは、彼の死を悲しみ嘆きはしたが、いつまでも哀愁に浸つてゐることの出来ない娘である。許婚者の死後、彼女は或るウラン人と結婚して、一生の問題を、手ツ取り早く片つけてしまふ實際的な臨機應變主義者であつた。此處に於て作者プウシュキンが、書き表はさうとした浪漫主義の弱點を持つて死んでいつた青年詩人と、その戀人であるオリガが、全然別箇の世界にも進み向つて行ける融通性のある女性であつたことがわかる。かくて只一人、田舎に取殘されて、罪ある戀人オニエギンを想ひ侘び、わが運命の幸なきを悲しみ憔悴してしまつた姉嬢タチアナは、やがて彼女の叔母たちに伴はれて、莫斯科へ向つたのである。數年の後に此の古都でも有名な、老富豪に嫁がせられたのであつた。老いたる夫は、かねてタチアナが尊敬する人物であつた。タチアナの社交界に於ける地位は次第に高まり、貴族富豪の婦人のなかの花形となつた。かゝる間に、遠い旅を終へたオニエギンが、この都へ飄然と現はれた。彼が発見した最初のものは、嘗て彼がその自然のままの、至純至情の初い初いしき戀を拒ねつけて顧みなかつた可憐な田舎娘が、華やかな社交界の明星として輝きいでゐる事實だつた。この社會でオニエギンはタチアナと巡り逢つた。彼は人妻である彼女に、默的な情慾をおぼえた。彼はタチアナに胸中を打明けて、彼女の愛情を求めた。正直なタチアナは、彼女の心の奥底にも、いまだにオニエギンを忘れかねる想ひの影が、消えやらすに残つてゐる事實を告白した。心美しきタチアナは、

實際にオニエギンを憎んではゐなかつたのだ。いや、彼女はまだ彼を愛してゐたのである。その處女時代に抱きしめてゐたオニエギンの戀情の中には、英雄崇拜の情熱が多量に含まれてゐた。たゞ今は既にさういふ積極的な強いものは何も持つてゐない。失戀によつて刻みつけられた心の深痕を、慰める淡き哀愁に伴ふところの、最初の男の忘れられぬ俤がある。それだけであるが、再びオニエギンの顔を見た彼女の胸には、聖潔な愛情が油然として湧きあがつた。最初の間はオニエギンが告白するところの自覺せる戀(?)に、愛情をもつて傾聽した。この恐るべき機會——危険な瞬間は、ことによると彼女を、罪惡に誘惑しかねない強い力を持つてゐたが、タチアナの信仰に厚い心には、德義を叫ぶ聲と、現在の夫に對する忠誠の念とが、交々響きわたつた。彼女は強かつた。トルストイの「アンナ・カレーニナ」に示されたやうな女ではなかつた。彼女の良心は勝利者たり得た。さまざまの盲目的な情慾に打克ち得たタチアナは、勇氣をふるひ起し、意を決して、オニエギンの願ひを、きつぱり拒絶した。彼は見ごとに復讐されたのだ。オニエギンは深い失望と懊惱を抱いて、モスクワを立ち去るといふ筋である。

プウシュキンの作品の大部分が、バイロンの影響の痕跡をとどめてゐることは、何人も認めるところであらう。「エヴゲネ・オニエギン」もまたその一つである。これは露西亞の上下階級に歡迎された彼の作品の中での、最大篇である。彼はこれを完成するのに七年を費した。これは作者

プウシュキンの實生活と、切放して見ることの出来ない、自傳的な告白録として見てもいい。作者は教育、趣味、人生に對する自己の批判を、主人公オニエギンの言行に表現させてゐる。かういふ作品に於ける「意識の上の心理解剖」は、從來の露西亞文學には、見られないものであつた。それは露西亞に於て、詩とはいふものゝ、小説の形式を藉りたことが、これを以て嚆矢とするのと同じであらう。物語の筋は以上の如く、題材は單純である。題材の單純は彼の作詩法にも適用して差支へない言葉であらう。「單純」にして「眞實」！物語の構想や形式は、バイロンの「チャイルド・ハロルド・ピルグリマヂ」に似通つてゐる——これも露西亞の文學評論家たちが、論じて來た事柄だが——然しそれは「型」の問題で「型」の中に鑄流されてゐる文字、一服のユウモアや皮肉は、そのまゝ「露西亞」の吐息だ。作者はこの物語の中に「露西亞」といふ大きな實在と、その實在が「眞實」「單純」に對する、子どもらしき無條件の愛好心と、作者自身の藝術觀を打込んでゐる。青年詩人レンスキーの一生は、浪漫主義に對する作者の見解である。浪漫主義の弱點とオニエギンの理想主義的現實主義の弱點とを闘はせてゐる。彼がそのために批評家たちから惱まされた二つの主義思想の争闘と見るならば、作者はその争闘の中に、彼が有つてゐた最も優れた、最も同情ある思想と感情とを投げ入れてゐる。露西亞の「現實」を、これほど如實に描いた作家は、これまでに一人もなかつた。それはこの長篇の詩物語が博した人氣の裏書ともなるだらう。當時の批評家、例へば文學上の功利主義代表者ともいふべき有名なドブリュポフやピサリエーフのやうな人達で、藝術は「藝術のための藝術」又は「藝術至上主義」は、藝術の目的である「民主主義實現への道程」「自由宣傳の目的」に達する一つの道程と考へて見ると、それは至つて縁遠いものと稱して排斥する。然しこの批評家達が、プウシュキンの作品を論ずる場合、彼等が主張する功利主義以外の新しい美學的根據はなかつた。彼等の間にはプウシュキンの作品は、「エツゲニエ・オニエギン」は、單なる繪畫的の詩に過ぎないとして非難したが、露西亞文學作品の中で最も讀書子の高評と歡迎をうけたのはこれで、批評家たちの説に耳を貸す者とはなかつたのである。私はこれらの批評家が叫んだ非難について、今少しく具體的な記述を試みて、プウシュキンの詩型に就て、簡単な話をしようと思ふ。

プウシュキンの作品のいづれもが、その題材に極めて原始的な單純さを示してゐるやうに、彼の作詩法に於ける形式や言葉も同様である。從來の露西亞作家が墨守して來た詩形學或は韻律法からいへば、プウシュキンの作品に示された暗比法（又は隱喩法）は、あまり多くないが、いづれも事實にびたりと當て嵌つてゐる。暗比法ばかりでなく、他の作詩法に於ても「ツイガン」（一八二四年作）に示されてゐるやうに、全體の韻律が如何にも齒切れよく氣持ちよく、自然的に排列されてゐる。プウシュキンの詩を読んで快感を覺ゆるのは、その韻律がなだらかで無理がなく、

何の苦心も費されてゐないやうな自由さと素直さと、のびのびした気分にある。これがプウシュキンの詩の感覺であり特徴であると思ふ。彼は二つに區分されてゐた「詩のための言葉」と「實生活のための言葉」の約束を破つて、この二つの言葉を自由奔放に混用し、使ひこなしてゐる。射殺された青年詩人レンスキが、死の前夜の瞑想を敘する條に使用されてゐる浪漫的な言葉とムウド、詩劇「ボリス・ゴドゥノフ」の中の、人物の獨白の古風な鏽は、それまで堅く守られてゐた詩の型を破つたものと見なければならぬ。このほかにもプウシュキンの詩は、露西亞詩の型としては、實に申し分のないほど典型的な整ひを有つてゐるので、從來の詩形學の立場から論ずることの出来ないやうなもの、例へば、總ての實在物象が、宛ら生きて詩となつてをり、その中にある會話なども、總て當時の社會に普く用ひられてゐた會話語であつて、自然描寫などは特に優れてゐる。それは着色された立體寫眞に生命を吹込んで活動させてゐるものゝやうだが、その技巧は決して新しい形式に出てゐるとはいへない。彼は詩の技巧、形式の技巧に關する特殊の創意を有つて、新奇の工夫を試みようとはしなかつたのだ。彼は露西亞人の心の奥底に潜む未知の世界の、閉してゐる扉を開かうとする考へはなかつたらしい。人間と自然界に關する「自然性」の描寫、そこに彼は何の苦心をも凝さなかつた。また人生、人間の運命に關する神祕な問題を封じてゐる王國に、彼は侵入するほど深刻な魂の持主でもなかつた。人間、自然、その中に彼

は只彼自身の靈魂を和らげ、美の感覺を生みつけようと努めたに過ぎないのである。だから新奇な珍らしい作詩法の技巧によつて、彼の空想を展開するための苦心は拂はなかつたのであらうといふことが出来ると思ふ。

彼のためには、一昔前の詩人にして科學者であつたロモノソフが紹介した、例の長短格（抑揚格）で事足りたのである。たゞ僅かに工夫された新形式といへば、いへないこともないのは、彼がバイロンの次に崇拜傾倒したセイクスピア流の詩型で、これを多少改變して、詩劇「ボリス・ゴドゥノフ」に應用してゐる。この詩劇は彼の藝術上の才能が、彼が狙ひをつけてゐた當時の實世間にある露西亞人の生活と同じく、引きつけられて作つたもので、この詩劇の藝術的立場は、カラムジンの露西亞史や「年代記」の上に築かれ、その劇の進行や科白や事件の委細や、場面の變化、人物の種類の雑多なこと、同一人間に善惡種々の性質あることが、作の巧拙に論なく、直ちにシエクスピーヤの作品を想起させるのであらう。

プウシュキンの詩に於ける藝術表現は、一般に輕蔑されてゐる「あり來りの形式」とか、または反對に尊重されてゐる「新技巧」とかいふ形式の問題には拘泥しなかつた。彼が心を苦しめたのは、彼の作品が「露西亞の國民性に即してゐない」といふ批評であつた。「國民性に觸れる」國民性を表現する」とは何ういふことか？とその時代の人々は考へたが、理解する者は少かつた。

ブウシュキンは實にこの問題のために頭を悩ましたのである。國民性云々の意味はブウシュキンにも、最初は明確に掴めなかつたらしい。ドブロリウポフは「エヴゲネ・オニエギン」の中に、どれだけの國民性が盛り込まれてゐるか？といつた。そのときピサリエフは、もはやそういう堅苦しき攻撃には飽き果てたやうな調子で「ブウシュキンは只の藝術家だ。たゞそれだけのことだ。彼は藝術上の効果を、彼の内部生活の空虚さと、智的缺如の憂鬱の神祕の中へ、露西亞の讀書階級を引摺り込むための道具と思つてゐるのだ」とさへ罵つた。但し彼の作品の中で「カピタンスカヤ・ドウチカ」(大尉の娘)に登場するブガチョーフなる人物に於ては、かゝる遺憾なきにしもあらずだが、作中の主人公或は女主人公の性格や思想が、露西亞の國民性に相應してゐるとか、相違してゐるとかいふ問題を離れて、強いて彼の作品の弱所を詮索するなら、ブウシュキンの作品の殆んど全部が、單純巧妙な詩の形式による、繪畫の連続表現に過ぎなくて、ドブロリウポフがいふやうに、露西亞文學はブウシュキンを俟つて、露西亞の上下社會層に侵入していつたけれども、それはたゞ社會の生活表面を掠めて過ぎただけで、「存在の實在性」或は「本體」よりは、文學上の傳統である「魅化」とか「美化」といふことに重きを置いてゐること明らかだ。作中人物の劇的動作によつて示される性格の展開には、何らの内部的表現はないかも知れない。特に主人公や脇役の性格不明瞭な點は——「コウカサスの囚人」に於けるが如く、作者の感情は、はつきり受

取り得るけれども、主人公の性格が、曖昧模糊としてゐる上に、何となく煮え切らぬところもある——が、それがために、ブウシュキンを詩人と見なすことは出来ない、など、ドブロリウポフの唱へるやうなわけには行かない。何故ならば、ブウシュキンは幼時から青年に達するまでの生活環境や心理状態が、彼等とは大いに懸け離れ、趣味性癖の上にも、多分に貴族的なものがあつた。パンのみで生きる人間を侮蔑したほどの男だから、ドブロリウポフが攻撃するやうに「ブウシュキンが描く社會の事實は、民衆の生活と非常にかき離れてゐる。彼が取扱ふ作中の人物は、社會を構成する最も狭小な範圍の人間に過ぎない。我々はオニエギンのやうな貴族風の人間ではない。萬一にも露西亞の社會が、オニエギン型の人間ばかりであつたら、露西亞といふ國は、眞に氣の毒な國であるといはねばなるまい。」ことなど左様に、ブウシュキンも、その事に無神経ではなかつたが(それは彼が露西亞國民性の象徴である民謡や傳説に基づいて創作した幾多の詩——例へば「ルーサルカ」(水の魔女)を見てもわかる)彼はかうした非難は、黙つて聞き流すのを賢明な反駁と考へてゐたのだ。藝術的には双方の立場や趣味教養が異ふのだから、止むを得ないことである。殊に流刑後の彼の心境を熟知する人々は、彼の創作態度についても同情こそすれ、非難はしなかつた。また批評家ピエリンスキーがいふやうに、ブウシュキンの作品は、この時代の批評家が理解する美の範疇から一步踏み出したもの、即ち、當時の文壇意識から脱却したもの



であるから、彼の作品が正解されないのも當然のことで、知己を百年の後に待たねばならぬものであらう。ピサリエーフの毒舌は斯くの如くであつたが、「エツゲネ・オニエギン」に登場する四つの相異つた性格者は、ツルゲニエフの「無用の人間」や、トルストイの小説などにも引出される、長い生命のある立派な國民性を有つてゐることが理解されるに至つた。

ブウシュキン派の文學者として、ブウシュキンの死後から、ニコライ・ゴオゴリに至る文壇に活躍した人々には、カズローフ、デルヴィグ、バラチンスキー、ヤズキコフ、ヴェネヴィチノフ、ボドリンスキー、ボレチャイエーフ、グリポイエドフ、レルモントフやカリツォフなどがある。

然しブウシュキンによつて捲き起された文學革命以後の文壇にあつて、ブウシュキンほど巨大な影を、露西亞の社會に投げかけることは出来ないまでも、ブウシュキンと肩を並べ得た巨匠は、ニコライ・ゴオゴリの他に、レルモントフ、カリツォフの二人であらうが、年代を追ふて記述しゆてくために、レルモントフに至るまでに、これ等諸作家について一言を費したい。

ブウシュキノは死ぬまへに文壇を見渡した。そこに幾人かの年若い人達が、彼の感化の中に、それぞれの創作に忠實に従つてゐることを確かめた。文壇は浪漫主義の大潮流に浸されてゐた。青年作家の殆んど全部が浪漫派の詩人であつた。だが露西亞浪漫派は、西歐のそれとは些か趣を異にしてゐる。「赤い月」とか「蒼い花」とか「星の雨」とかいふやうな言葉をもつて、飄るげな

がらも西歐の浪漫派作品の傾向を點示し得るならば「蒼い花」や「赤い月」の氣分や意味を含めた言葉で表現されたり、妖魔の王國へ彷徨したり、幻想的な夢を見たり、宇宙即神論者流の思想を追ふたりする文學上の傾向は、元來の露西亞人には向かないのである。元來の露西亞文學にもまた縁が遠いのであつた。従つて西歐の浪漫派文學を、露西亞に紹介した人達は、概ね失望した。そもそも露西亞人の性質としては、さういふ種類の作品に親しみを感ずる前に、彼等の頗る嚴肅な現實の大地から、一足をも遊離することに危険と不安を抱いて、これを希望しない心意が、これに共鳴を見出し得ないのであつた。いつの世にも、いかなる場合にも「星の世界へ」(ソログーブ)攀ち登らうとは思はない露西亞人にとつて、彼等を樂しませるものは獨逸文學の「大袈裟」ではなくて、「自然に親しむ質朴謙虛な心」の表現である。この意味からしても、道德學者は存在したが、哲學者は生れなかつた。スラブ民族の間に、西歐浪漫派作品の移植は成功しなかつた。これに就ては可なり後年の話であるが、一九八八年、レオニード・アンドレエフが處女作ともいふべき「沈黙」その他を、マキシム・ゴリキイの斡旋で發表した時の、世間の惡評とトルストイ夫人の非難を思ひ出す。トルストイ夫人は「ノヴォエ・ウレミヤ」紙に、かういふ意味の一文を寄せた。「可哀相な作家アンドレエフのやうな人は、人間性の退化と惡傾向の、醜怪な事實を示すことだけに成功する。彼は何の進歩もなければ、いゝ加減な知識しか持合せない人達に對して、人

間性の退化腐敗した残骸を、露出して見せて、喝采させやうとするだけの人だ。かれは人間の墮落性と弱點と不幸に關して書いてはゐるが、同じ描くにしても、あのドストイエフスキーが描いたやうな、自然界の美とか、藝術の力の偉大さが望ましい。彼は人間の魂の高尚と憧憬とを有つてゐる驚異すべき廣大な神の世界については、眼を掩ふてこれを見せることを欲しない。眞の藝術家は、人間性の醜惡でも、罪惡の方面ばかりを明示するに止まらず、善とか眞理とかいふものに對し、高尚な理想を抱くことによつて生れる闘争が、人間の惡や弱點に對する勝利を獲得することを描き出さねばならない。不幸な民衆の精神の光明や、美や善や愛や神を知るために高く翔けあがるべき賜物の翼を、このアンドレエフのやうな人によつて、切り取られるのだといふことを、私は世界に向つて揚言したい。」云々。

トルストイ夫人ばかりではない。浪漫主義の一派と見做される惡魔派や神祕主義の作品を排撃する反アンドレエフ黨は、ブレイニン(「ノヴォエ・ウレミヤ」記者)のやうに「この新進作家アンドレエフは、マキシム・ゴリキーの足跡を濁してゐる」とか「その作品はダナンチオやロオデンバッハやメテリリンクの模倣である。そこには何の希望もなく、不健全であり贗造したものである。」などと言つた。アンドレエフの時代に於てすら、かくの如しだ。その當時に於ては、象徴主義や頽廢主義や、哲學的な詩の誕生には最も不利な時代であつて、反對派の作家らの絶え間な

き迫害に遭はねばならなかつた。では露西亞に勃興した浪漫主義文學運動は、どんな性質のものであつたかといふことになるが、その特徴は要するに人間の頭腦の、非浪漫的抑制である。頭腦の拘束、頭腦の矮小、何らの深刻さもなければ、新奇さも奔放さもない。それは作家の氣分によつて作られた、ニコライ一世時代限りのもの、アルカチエフの異端者の機械のやうなものだ。一面に於ては「將校用の浪漫主義」であり「書記官、番頭用の浪漫主義」であつた。こゝに罪人の絞殺官がある。これは必要な役目を持つてゐるから、堂々と存在してゐるが、しかしこの絞殺吏を、詩に作つて唄ふ必要もなければ、そんな作品は美しかるべきものではあるまい、といふやうな理窟から成り立つたものであつた。この中に在つて異彩を放ち、かゝる傾向の作品から飛び離れてゐたのが、レルモントフであつた。當時の露西亞浪漫派作品が、西歐の模倣であつたことは言ふまでもないが、しかし露西亞浪漫派の、西歐の本家に比べて、いかに悲惨であつたことか！彼等の「定則」と「型」とは、ヴィアゼムスキー太公によつて作られたもので、プウシュキンのためにも、ボレジャエフのためにも、喜ばしく有難いものではなかつた。

私は先づ盲目詩人イヴン・イワノヴィッチ・カズローフ(一七九九—一八四〇)の紹介から始めよう。「キエフ物語」僧の作者であるカズローフもまたバイロン宗の信徒だつた。われわれはジュコーフスキーを連想するやうな、苦惱の神聖化やその他特殊の哲理が、その頃横行してゐた

事實を知つてゐる。特殊の哲理とは何か？世の中に幸福は確かにあるが、それは恒なきもので、絶え間なく變る。我々の心を慰めるのは、過ぎ去つた幸福の記憶だ。幸福の記憶を呼び戻して、我々を慰めてくれるものは、現在の苦痛と苦惱に他ならぬ——かういふ意味の「苦惱の神聖化」を文學上の一提案として現はれたのがカズロフであつた。彼は至つて温厚な人物であつた。従つて作中の主要人物は、彼のやうな受身・忍辱・柔順な思想に育まれた者が多い。彼は盲人になつてから詩を作り始めた。不幸と災厄は彼を詩人にした。彼の詩に掩ひ被さるものは、深い憂愁の面帛である。(小篇「難破船」には悲哀の諷刺が漲つてゐる。單調ではあるが、淋しい一つの力が彼の作品の底流をなしてゐる。その作「ナタリア・ドルゴルスカイヤ」は廣く讀まれたものである。

#### 難波船 (カズロフ)

紫に閃めく日は死にはてた  
心いためる私は  
潮の眩きに眠りへ誘はれ  
海邊を彼方へ彷徨ひ歩いた。

そこには帆や柱を失つて  
こわれた船が半ば砂に埋れてゐた  
ある過去の日の嵐に沸き立つ波に、獨り寂しく打ちあげられたのだつた。

それから長い間濕露と夕立が  
船板を苔で封じてしまつたのだ。  
その隙間にはいくつもの花が開いた  
海藻の瘤をつけて青々房々と。

岩に縁とられた海岸に打上げられたのだが  
彼女(船)は何處から何處を指して行くのだつたらう？  
彼女(船)が亡はれた暴々しい時刻に  
絶望的な彼女(船)の運命を誰が共に分つたらう？

黙せる海の底、黙せる波浪

そこにこそ彼等が運命の祕密は封ぜられてゐる  
夕陽の光はたゞ嘲笑ふ  
黄金に閃めく廢船を。

漁夫の妻がその舳に腰かけてゐる  
遙かの海を探し求めるやうな眸で  
彼女は待ち、見守つてゐる  
微風にまじる唄うたひながら

彼女の側には一人の男の兒が  
麻のやうな髪の毛をくねらせて  
高らかに笑ひながら、面白さうに波を蹴つてゐる  
縮れ毛は風にひるがへる。

彼は優しい花を摘みとつた

そこには疎らな海藻の總がなびいてゐる。

可愛い幸福な男の兒、彼はどうして知つてゐるだらう？

彼の手にあるその花が、墓場から摘みとられたのだといふことを！

この詩の作者カズロフよりも、一年早く生れたアントン・アントノヴィッチ・デルヴィグ（一七九八—一八三一）は、プウシュキンと共に、例のツアルスコエ・セロの學校に在つたが、その詩的才能の芽生えは、プウシュキンよりも晩かつた。またプウシュキンのやうな旺盛な記憶力にも知識の吸収力にも恵まれてゐなかつた。彼はたゞ押し進んでいつた。彼は最初から詩人として出發したのではなかつた。一八〇七年の戦役に加はつてゐた時分、彼の作に成る一篇の詩物語が、同僚の賞讃するところとなつたのが契機で、彼の文筆生活は始まつたといつても差支へない。その詩風は華々しい性質のものではなかつたが、彼の詩的鑑賞眼は他の文學者や批評家の群を抜いてゐた。彼等の言には耳を掛けないプウシュキンさへが、デルヴィグの説には敬聽したほどである。その發行するところの「文藝雜誌」（一八三〇）の權威は、不動の礎石の上に打建てられてゐた。「友よ、我は今日汝と祝宴を張らむ」などは、彼の詩のなかでも評判のいゝ作だ。デルヴィグに二年後れて、エヴゲニエ・アブラモヴィッチ・バラチンスキー（一八〇〇—一八四四）が、タムボフにあるヴィアジュテ村の、バラチンスキー將軍邸で生れた。エヴゲニエ・バラチン

スキーの母は、首府ベテルスブルグのスマルヌイの學校を卒へて、マリア・フェオドロヴナ皇后に仕へた婦人であつた。彼の詩は、プウシュキン時代の詩人達の作品に共通な哀調を帯びてゐるが、他の企て及ばない大きな着想の下に作られてゐるのが、特徴であらう。それはプウシュキンによつて裏書きされるまでもなく、彼の作品の全體にわたつて、何人も觀取することの出来る事實である。彼はその詩と物語に示されてゐるやうな、憂愁な魂の持主であつた。彼は現實世界から詩の世界へ遁走した、一箇の脱囚徒であつた。彼は自己の心に住む兒童性や、「單純の幸福」を、現實世界に奪はれることを怖れた詩人である。彼は理想と現實の不調和や矛盾に苦しみながら、「現實」に向つて愚痴を滂した人間であつた。現實の中の眞理は、葬式の松火だ。失望と厭世は彼を捕虜にした。彼は終に死を冀ふ氣持にまでなつた。人生の謎を解き、生活の鎖を斷切つてくれるものは、死であると考へた。彼の頭には、地上の人類が死滅し盡して、淡白い霧のみが、濛々と立ち罩める光景が映つた。彼の後に來る詩人ヤズイコフのやうな沈黙家であつた。彼は容易に文壇へ乗出さなかつた。一八四二年。哲學的、瞑想的内容を有つ幾多の詩を發表し出した時でさへ、「夕闇」の匿名に隠れてゐた。影のやうな輪廓に掩はれた、蒼白い屍のやうな詩を、次から次へと作つた。世を棄て去つた憂愁の厭世家バラチンスキーの文學後繼者は一人もない。彼は後繼者を得るほど、力強い印象を文壇に與へなかつた。浮世の生活は、詩の國を破壊するものだ。詩人

の心を頭にするものだ。浮世住居の人間は、總てが慾得づくの功利屋であるといふことを詠つた作に「最後の詩人」がある。彼は「探求の精神」とか「理性の發展」とかを、恐ろしいものに數へる、人生への高遠な理想を持ち得ない人間であつた。かういふ思想は、彼の美しい作品に、いくらかも散見する。作には「エダ」や「舞踏」や「ツイガン」があつて、彼の長所と缺點を並備してゐる。

#### 死 (バラチンスキー)

喜び樂しめよ。世の中には何も無いのだ

善も惡も短かいものだ

陰謀だらけの運命は、さまざまに人を翻弄する

ある時は喜ばせて見たり

ある時は悲しませて見たり

また常に變らぬ友もないのだ

聽き給へ。明るい生活を營む人々よ

いつかは君たちに翼が生えて飛び去るだらう。

怨むなよ。世の中には何もないのだ  
もしも悲しみが偶然に

我々の生活の上に落下したところで

それが何になるんだ？

移り變りの世の中で

神様が苦痛の中から、刺を半分抜き取つて下さる時には

みんなへ一樣に

翼を下さるのだ。

ニコライ・ミハイロヴィチ・ヤズイコフ（一八〇三）の少時については、記録に乏しいので、詳らかに知ることが出来ない。或る書には、彼十一歳にしてペテルスブルグの工業學校に入るとしてあり、或る書では、全きりの無教育者にされてゐる。少年時代の彼については後日の研究に俟つこととして、こゝでは彼の作風に言及するに止めて置く。批評家ビエリンスキーはいふ

「ヤズイコフを有名にしたのは、わづかの年月であつた。彼の作品を読む人の誰もが感ずるやうに、彼の詩は独自の個性による形式と内容を備へてゐる。その音律は精巧に、その型も力強く透徹してゐる。彼の名聲は露西亞文學史から拭き消し去ることは出来ないであらう。たとへば民衆

が詩といふものを讀むのをやめる時が來ても——彼の名は露西亞語と露西亞文學を學ぶ者に、いつまでも忘れられないであらう。その短日月の間の勞作は、露西亞文學に大なる貢獻をした。彼はあらゆる意味に於て、大膽であつた。これが取りも直さず、露西亞文學に於ける彼の功績の因をなしたのである。これまでの露西亞文學家は甚だ臆病であつた。小説にせよ、他の形式の作品にせよ、一度世に現はれるや、必ず彼等を驚かし、脅かしたものである。しかしヤズイコフの著しい個性を帯びた放膽無類の詩句が、民衆の意向に投じた結果は、メルリンの出現と同じものがあつたのである。彼の作品は臆病な文士達を大膽ならしめた。それは誰でも構はない、たゞ大膽であればよろしい、といふのとは譯が違つて、彼等自身特有の態度に順應するに於てである。だからヤズイコフは、誰でも其人の作る詩の中に、自己を見出す機會を與へたのである。露西亞文學に於ける浪漫主義の全時代を通じての仕事は、即ちそれであつたのだ。その仕事は今や見事に成し遂げられたのである。」

前にも一寸述べたやうに思ふが、露西亞浪漫主義を、いはゆる擬態浪漫的傾向から、導き出して結晶させたのは、ヤズイコフであつた。

長いあいだ目星い作品の出なかつた時期だつた當時、プウシュキンに激勵された彼の活動は、目醒ましいものだつたに違ひない。一八二六年、プウシュキンはその流刑地ミハイロウスコオエ

で、ヤズイコフと會つたのである。彼は洵に大膽な苦學力行の人であつた。その苦學時代には「ジュコーフスキーの焰」の妹といはれたウァイエコフ教授の妻に従つて、沈黙を守り続けた。女性の美を描いた詩人として、ヤズイコフは露西亞文壇の第一人者である。また彼が初期の作品に、舊約全書を模倣したこと、後期の作品特に抒情詩に、純な宗教的傾向となつて現はれた。一八四四年に「地震」を發表した。いはゆる露西亞愛國者として、祖國愛の鼓吹者として、有名な詩人アクサーコフは、續いて發表されたヤズイコフの詩「我々のものにあらず」を讀んで「ヤズイコフは基督の名に隠れてゐるスラブ流の巡查だ」と評したほど、信仰的な内容を有つたものであつた。他に「燈臺」「ガストノ」「海水浴をする人々」「船」「海」の作がある。これらは長い異國放浪時代の記録を、繪のやうに生々とした自然描寫で書綴つたものである。

以上の人々が、ブウシュキンの感化をうけて成長してゆくなかにあつて、ブウシュキンとは殆んど没交渉で、しかも當時の浪漫派よりは寧ろ古典に近寄らうとする純潔な作風を示した人に、ドミトリ・ウラヂミル・ウエネウイチノフ（一八〇五—一八二七）がある。詩人といふよりは、哲學者肌の批評家だ。長生きをしたら、後世の人々に詩人としては取扱はれないで濟んだかも知れなかつた。彼は二十二歳で夭折した。この人とは正反對の立ち場にあるブウシュキンの門弟、「金持」「貧乏人」の作者ポドリンスキーや、莫斯科で學窓生活を送つてゐる時分から、誇驕的な詩文

で知られたユウモア物語「サーシユカ」の作者たる銘詞詩人ボレジャエフがある。彼は天性ユウモラスな男であつた。十二月黨員としての嫌疑をうけて、ニコライ二世や大臣の前に引出され、自作の「サーシユカ」を朗讀したことにより、皇帝の接吻を辱ふした男として、忘れることの出来ない奇物だ。彼は後に兵士となつた。豊富な詩才と多くの題材を傾けて、抒情詩や傳説俗謡を作つたが、皇帝の命によつて莫斯科に遣られ、肺の疾患と酒精中毒で斃れた。それは一八三三年としてある。

ボレジャエフの後にグリボイエドフが来る。われわれは暫くのあいだ、この新らしき詩人の前に立ち停るべきである。喜劇、諷刺、抒情詩、浪漫主義的の歌劇、舞踊の供給者であつたシャクノヴスキー太公や、歴史小説家ザゴウシュキン、翻譯家クメルニツキーやコルネイユ、ラシーンの翻譯者カテーニンなどの友達であるアレキサンデル・セルギエヴィッチ・グリボイエドフが活躍の時代は、露西亞に於ける演劇が隆盛を極めてゐた。それは「演劇と戯曲」の章に述べだやうな有様であつた。十二月黨とやゝ密接な關係をもつてゐたらしいグリボイエドフは、莫斯科の最高社交界に屬する階級の人であつた。十七歳でモスクワ大學を卒へ、サルツイコフの驃騎聯隊に入つたが、一八一六年には既に除隊となつて、外務省に勤めてゐた。官吏である彼が文筆生活に入つたのは、「歐羅巴新報」へ、軍隊の祭式典に關する一文を寄稿したのが機縁をなしたのである。

また莫斯科の俳優たちに接近したことも、彼をして著名な喜劇を作らせる動機となつた。その喜劇の中には(一七八九年から一八七三年まで)海軍省本部主事ア・ア・ザンドルとの共作もある。かくて一八一六年には、首府ペテルスブルグの一劇場に、喜劇「若夫婦」を上演し、翌年には「伴りの不信心」を上演した。元來彼はリリエフやパツウシニコフ以上に擬古文學——傳統の雰圍氣に育てられたのだから、初期に於ける喜劇の制作に於て、さうした傳統趣味の影響をうけたことは、當然のことである。一八一八年にはベルシヤに大使として赴任したが、これに先立ち暫くの間、莫斯科に滞在中、悠々觀察する機会を得たモスクワ社交界の最高階級を、題材とする有名な喜劇「ゴーレ・アト・ウーマ」(智慧の災ひ)が作られたのである。この喜劇はクルイロフの寓話に示されたやうな、抑揚格の長短さまざまの擬古詩句から成り立つてゐる一場、一事件、それを一日に一事件といふ割當てゝ書いたもので、今日まで此の喜劇を、壓倒するほどのものは出来なないといふ。これは眞にグリボイエドフの傑作であつた。取扱はれてゐる事柄は、非常に單純で、ある點はプウシュキンの「エツゲニエ・オニエギン」に似通つた部分もある。然しそれとは異なる意味に於て、即ちこの作に於ける社會に對する美學的觀點と歴史的意義とによつて、社會に持て囃され、今日までいくらかでも生命を保つてゐる點は、一はその題材を貫くグリボイエドフの思想に不朽のものがあるかであらう。この喜劇の主題は「舊時代」と「新時代」の闘争なのだ。

喜劇の人物のなかには、主要役を勤めるファームノフ(彼の伯父がモデルである)といふ佛蘭西流の精神教育をうけたモスクワの古い貴族が(またその貴族は、自分たちの結束を固めて、これまでの貴族に附隨する名譽を保たせようとするほかに、何の野心もない人物である)その他にも、その當時の社交界の實在人物を捉へ來つて、悉くモデルにし、廢類しつゝある舊時代を表象してゐる。その梗概を記す。

#### ゴーレ・アト・ウーマ

〔人物〕 ファムツフ

勤勉な老高等官——ソフィアの父——いかにして娘ソフィアに善良な教育を施すことが出来るか、又、いかにして富み且つ家柄の婿を得ようか、家名を揚げようか、と考へてゐる。

〔人物〕 チャツキー

新時代の空氣を呼吸し、新思想を抱いてゐる青年——把持する主義主張は、老高等官ファムツフに危険がられ、敬遠されてゐる。彼はソフィアの戀人である。新時代の青年は淺薄なる百科辭典的教育以上のものを有たねばならない。官吏たるものは、規則を嚴守し、禮儀に正しくして、これに拘泥する以外のことをなすべからず。法律は親族關係、その他友情的交渉以外のものたるべし。(その時代の法律は情實第一だつた)社會の興味は、カルタを弄び、夜會、飲酒、舞踏、雜



談に耽る以上のものを持たねばならぬこと。(これも遊惰な貴族階級の頂門を刺してゐる)これが此の青年の對社會要求である。即ち作者グリボイエドフの註文である。

〔人物〕 モルチャリン

老官吏フアムソフに輪をかけた男

〔人物〕 スカロゾーブ

大佐―無教育―仕事に忠實な男―ソフィアの有力な婚後補者。

〔人物〕 ミハイロウイツチ

愚物の評議に興味を持つ男。氣骨のない亭主。

〔人物〕 ザゴレッキ

手癖の悪い大嘘吐き。評判のよくないおべつか者―青年チャッキが狂人じみた思想に取憑かれてゐるといふことに面白味を感じて、市中を觸れ廻つて歩く男。

〔人物〕 ナターリア

ミハイロウイツチの妻―氣骨のない亭主を嘘と偽善であやつる、夜會と舞踊のほかには生存目的を持たぬ女。

〔人物〕 フレストワ

ソフィアの老いたる叔母。その飼犬と一刻も離れてゐることの出来ない愛犬家。

〔人物〕 レベチロフの仲間

民衆の自由を妨げるために、民衆に泥を投げつける連中―英利西俱樂部の空氣を代表する―貴族の無能と放縱の表象―老高等官フアムソーフさへも、この仲間を輕蔑してゐる。

〔筋〕 三年間外國にゐた新時代の青年チャッキが、故郷なつかしさに、莫斯科へ歸つて來て、ソフィア・フアムソフと會ふ。ソフィアの心は夙に青年から離れ、彼女には應はしからぬ父の秘書値打ちのない男モルチャリンに戀してゐる。彼女は戀の成就を祈つてゐるが、男の方では自分の利益ばかりを念頭に置いて、娘よりも主家の犬を可愛がる。チャッキは失戀し、伯父フアムソフ家を去る。ソフィアもまたモルチャリンに棄てられ悲しみに沈む。モルチャリンの彼女に對する冷淡、何事によらず打算的であつたことが、人々に知れる。たゞこれだけの單純な喜劇だ。これまで露西亞で上演されて來た佛蘭西風の道化芝居と異なる點は、その大詰めが不幸に終つて、それつきりであるところだが、この喜劇に於て、グリボイエドフの社會思想は、明確に會得される。その劇的又は文學的意義、價值については、十二月黨員の一人であつたベスツウジェフが「極星」の中で述べてゐる。曰く

「大膽にして鋭く深く描かれてゐる人物の性格と、莫斯科風俗の生けるが如き描寫と、章句に

含まれてゐる悲惨な感情と、會話に現はれてゐる作者の智的、頓才的技能と、これまで氣にもとめられずに、我々が使用した言葉づかひの輕妙さ自然さ——それが我々を驅つて、注意の封鎖の中に追ひ込むのである。感受性の鋭く強い人たちは、この喜劇を讀んで笑ひ出すと同時に、涙の湧きいづることを、禁じ得ないだらう。佛蘭西風の事物に、自己を楽しませる習慣に囚はれてゐる人達や、ありふれた類型的の組み立てによる物語の背景に不満を抱く人達は、この喜劇はその作者が従來一定の劇的約束に則つて作らなかつたといふことで、或は感心しかねるといふかも知れないが、かやうな批評を試みる人達には、勝手にいさせて置かう。かゝる人達には、この喜劇が將來の露西亞に於ける國民性に基づく創造の、第一位に置かれねばならぬものである、といふことなどは更に解らないのだから。」

と。作者グリボイエドフは、エルモローフ將軍やバスキエヴィッチの下に、ゲオルギ州グルージアに、一官吏として勤務しなければならなかつたが、一八二七年には土耳其との平和が恢復し、彼は全權大使として、あまり行きたくもない任地へ向つたのである。そこに滞在中、彼はグルジヤ、アルメニアなどの、南東露西亞の風物に精通した人々と交際した。これらの半黄色、半白色、半黒色人種は彼に阿諛追従し、囚徒となつてゐる彼等の親族たちの解放を依頼するやら、その他自己本位の利益獲得に熱心なものでつた。やがて彼等の間に小さい陰謀が企まれた。陰謀は發覺

した。その結果は露西亞大使と土着民の衝突となつた。事態は漸く險惡に傾き、終には大使グリボイエドフが夢想もしない騒動となり、立派な叛亂の形を取るに至つた。土着民は遂に大使館を襲撃して、數名の館員を殺害し、大使グリボイエドフをも刺殺してしまつた。一八二九年一月三十日の出來事だ。グリボイエドフの遺骸は、チフリス河の西方、聖ダヴィッド寺領へ運ばれて埋葬された。その墓頭に後年、彼の妻が一基の記念碑を建てた。

プウシュキンの死後、詩人として社會的に名高くなつたのは、ミハイル・ユリエヴィッチ・レルモンツフだ。彼が浪漫派の文學運動を起したのは、プウシュキンの死後だつた。

私は彼の思想や作風や技巧について、私の管見を述べる前に、日本には廣く知られてゐない彼の生ひ立ちを記したい。

#### ミハイル・ユリエヴィッチ・レルモンツフ

レルモンツフ幼少時の記録は、殆んど傳はつてゐないと言つていゝのだから、その頃の彼の生活は、詳らかに知る術もないが、蒐集し得たるものによれば、彼の最も近い先祖は露西亞人ではなくて、蘇格蘭人である。彼の父の代までも、半蘇格蘭人だつた。父の名はレルモンツフなる英利西姓を、露西亞化したもの、即ちレルモンツフといふだけで、ほかには何一つ知れてゐない。一

六一三年はロマノフ王朝の始祖たるミハイル・ロマノフが、衰微せる國勢を恢復して、始めて帝位に登つた年である。この年、露西亞軍が侵略した波蘭の或る小なき町に、ジョージ・レルモンツフの名を稱して、この町の軍隊に入つた一蘇格蘭人が、詩人レルモンツフの祖父である。この祖父から何代前の蘇格蘭人が、波蘭にやつて来たか、それはわからないが、非常に貧しかつたらしい事實は、詩人レルモンツフの代になつてから窺ひ知ることが出来る。詩人の生母が夫を棄て、逃げた經緯でもわかる。元來この母親が、波蘭の小さい町でも、領主ともいはれるほど、裕福な貴族の大地主の娘でありながら、甚だみすばらしい陸軍士官レルモンツフと結婚したる次第、一文なしの男と戀におちたからで、たゞそれだけの理由だつたから、この戀の成り行きが、世間に知れて、領民の反感輕蔑を買つた結果、どうでも他國へ駆落ちしなければならなくなり、到底出世の見込みのない青年士官と、十四歳の少女とは、小なき町を逐電したのであるが、逃げたあとで、生活に窮した結果、眞劍に痛切に馬鹿な眞似をしたと思ひ、後悔し出したのだ。若き夫婦は袂を分つた。しかし少女は流石に我が邸に戻ることもならず、そのとき莫斯科に住んでゐる母親アルセニエワの許へ出かけたのである。士官の方はその後、少女と逢ふ機会があつたか、どうかは知らないが、後年詩人として立つた我が子と、密かに會つてゐることからして、獨身を通してゐたらしい。少女は莫斯科で詩人レルモンツフを生んだ。この子供が三歳の時に年若き母は病歿とをうけたのであつた。

祖母アルセニエワは彼女の生活のあらゆるものを犠牲に供して、少年レルモンツフの教育にかゝつた。娘（詩人の生母）の生存中も死後も、折々少年の家を訪れて、その度毎に激しく口論し、追はれるやうに、すすごと何處かへ立ち去りゆく貧乏士官——その時分には既に軍籍を離れて、何をして生活の道を立てゝゐたか知ることが出来ない——が、子どもを引取るとか、自分の手で教育するとかいつたやうな相談にも、祖母アルセニエワは應じないばかりか、教育の責任は自分が引受けるからには、子どもの顔を見に来ないやうに、たとい逢ひに来ることが差支へないにしても、あまり度々では困るといつて、日頃蔑んでゐる元士官を遠ざけた。祖母の胸中に立入つて見れば、父と子が愛情に引かれて、密かに會ふ時は、このまゝ何時までも離れたくないに違ひない様子が、見てゐられなかつたのであらう。この父には我が子を教育する力はないものと、祖母は頭から決めてかゝつてゐた。それは子どもが、物心づく頃まで續いた。父親が言ひ込められ

たり、辱められたりする光景が、子供心にも哀れ傷ましく、淺ましい悪口などを、少年は祖母に向つて吐き散らしては、言ひ争つてゐたといふことだが、祖母は平氣で取合はず、ますます孫を愛したといふ證據の一つとして、祖母は少年の保守的な、やゝともすれば取りとめのない物思ひに沈んでゐる陰氣な習癖と、病弱な體を直し正すために、彼女の家屋敷が立ち腐れにならうとしてゐるベンザ政廳の田園に移住したのである。また少年が十歳に達した時、同じ目的で彼女は彼を景觀のいゝコウカサス地方へ遊びに連れ出したりなどしたのである。

一面に於ては、これまでのやうな面白からぬ家庭で起つた紛擾のために、生々しき少年の性情が壞され、低下されるやうなことがあつては困ると思ひ、少年に頻りに讀書をすゝめたりなどした。書物に異常の興味を見出した少年は、實際毎日書物にばかり讀み耽つた。

その書物といふのは、民謡や詩であつた。祖母アルセエワは少年が近所の子供らと遊んで、碌でもない智慧をつけられたり、宗教の上から見て賤しい事柄を覺えたりすることを恐れて、成るだけ家外へは出さなかつた。

この孤獨の習慣は彼が學校生活に入るために、莫斯科へ出る頃から、そこを去るまで續いて、彼は年中一人ぼつちだつた。莫斯科の學校でレルモントフといへば、誰にでもこの孤獨な青年を思ひ出させるほど彼の孤獨と無口とは有名だつた。

少年が莫斯科へ修學に上つたのは、十三歳の時で、學校は祖母が選定した寄宿制度の學校だつた。それは大學に進むべき豫備門だつたが、卒業間際に意地の悪い教師の排斥運動が學生間に行はれ、その仲間に彼も加はつてゐたために、退學を命ぜられたのである。詩ばかり作つて學課などは放擲してゐる學窓生活は、この偶然の出來事から終を完ふすることが出来なくなつたわけだ。微妙繊細な心の神經質の青年レルモントフは、首都ベテルスブルグの大學に入れて貰ふために、莫斯科を去つたが、退學事件に關する彼の行狀が曲歪されたまゝ、ベテルスブルグの大學に通報されてゐたために、莫斯科に於ける過去二年間の修業は、全然認められなくなり、彼は自棄半分の運命論者的悲觀に陥り、且つ恐ろしい皮肉屋になつて、學問をあきらめてしまつた。彼が選ぶ餘地を有つ學校は陸軍士官學校のほかにはなかつた。彼が籍を置いた護衛兵學校は、近衛兵養成を目的とするので、學生を貴族社會や上流階級に募集した。

レルモントフの傳記に筆を染める人は、必ずや彼が一友人に宛てゝ書いた短い書簡の一節を抄いて、詩人の志のあるところを明らかに示すだらう。書簡の内容は、軍人生活が彼の志でも目的でもなく、據ない事情で、この道をとりはしたが、しかし軍人が嫌ひといふわけでもない。詰らぬ一生を三十年も五十年も、だから生き長らへるよりは、軍人にでもなつて、戦争か何かの砌に、一發の銃弾でもつて、あつさり消滅した方が、どれほど氣が利いてゐるか知れないといふこ

とだ。この書簡は一八三二年に書かれたものゝやうだ。

陸軍の學生になつたレルモンツフは、戦闘の訓練も大いにやらされたが、時によると、朝から次の朝まで姿を隠して、空つぽの教室に閉ぢ籠つたまゝ、詩を作ることもあつた。彼が初期の作「天使」や一代の傑作「悪魔」などは、かやうな軍隊生活の間に、ひそかに成つたのである。

軍人學生である彼の同輩には多く、酒色や悪戯に溺れることを名譽と心得る者どもがあつて、それは後年の彼が、淫佚的悪魔的、また頹廢的な詩を生むための彼には、智育教養に何の貢獻をもなし得なかつた。彼は華奢な修業を知らず識らずに積んでゐたのだ。レルモンツフの道德生活は、軍隊生活の數年で壊れさうに見えた。彼が少時から抱いてゐる文學的野心は、脆くも潰えやうとしてゐた。危険な時代であつた。偉大なるべき彼の趣味は墮落の淵に立つてゐた。祖母アルゼニエワの家が富裕であつたし、彼に祕密の奢侈費を、惜氣もなく貢いでも苦痛を感じない事實を知つてゐたからその日その月の流行を追ひ廻る華々しくも愚かな貴族社交界にまで、彼も足を踏み入れるやうになつたのである。

然し藝術の女神は、かゝる時にも、彼を見棄てはしなかつた。彼は詩作を怠らなかつたのだ。やがて十九歳となり、學校の全課程を曲り成りにも終へた。彼は驃騎聯隊の士官に任命された。彼が詩人として社會的に認められるやうになつたのは、この年からである。いかにして彼は一時

に名を成したか？軍隊生活といふものが、彼に取つては眞實の軍隊生活ではなくて、作詩生活であり、多少でも藝術家の時間であつたことは、前にも一寸書いたが、彼の短い生涯を通じて觀察すれば、作詩に油がのりかけて來たのは、實に、この一八二八年から一八三二年にかけてであつて、傑作「悪魔」や「イズマイル・ベイ」のほか、露西亞傳説とか物語とか脚本なども書いたし、日常崇拜するバイロンやゲーテやハイネの詩なども、手當り次第に翻譯したのである。

これは廣く知られてゐないことだが、詩人として名高いことを知ると同時に、語學の天才であつたことも銘記したい。レルモンツフはかうした生活の中で、創作に對しては嚴格な批評家でもあつた。かくて大きな影を社會に投げかける機會が、突然にやつて來たのである。それは彼にとつて少なからぬ恐慌であり、衝撃であつた詩聖プウシュキンの死であつた。

一八三七年の冬、プウシュキンが決闘に斃れたといふ報せをうけた時のレルモンツフは、たゞ茫然として成すところを知らなかつた。彼は生れて始めての深い悲嘆を経験した。一時はプウシュキンの盛名を嫉んで、密に彼の敵を以て自ら持した彼だが、プウシュキンの訃報に接するや、忽ちにして此の偉大なる詩人のために、その悲愴なる最期を悼むの眞情、恐ろしいほど深刻なものがあつた。プウシュキンへの一般民衆の同情は、彼が存命中、絶へざる侮辱を彼に與へてゐた輕薄な知識階級に向つて、火焰のやうな烈しい憤怒と化していつた。この民衆の憤怒は、レルモ

ントフをして「ブウシユキンの死について」といふ哀悼詩を作らせた。昂奮の頂點に於て彼は書いた。

彼が發表して來た作品は、これまで易々と檢閲官の眼を通りぬけて來たが、今度はさう容易くはいかなかつた。ブウシユキンの哀悼詩の末尾に、當時ブウシユキンを殺した人々のうちの或る一人の男と會話した文句をつけ加へ、そこへ持つて來て、ブウシユキンの誹謗者たちを、「自由と天才と眞理の虐殺者」の名で痛罵した。その文の勢ひが餘りに激烈であつたために、先づ以て檢閲官の眼を敵たしめ、ブウシユキンを排斥してゐた二人の宮廷役人の耳に傳はり響いたのである。二人の官吏は有名階級に屬する人々であつたために、レルモントフの痛罵を取上げて、詩人の行動を皇帝に悪しざまに誇張して奏上し、彼の處刑を願ひ出た。かくて二高官の不機嫌はレルモントフをカウカサス流竄の旅へ追ひやつた。

ブウシユキン哀悼の詩檄が、轟しく喧傳されてゐる間に、その作者は彼にとつて懐しのコウカシヤに護送され、彼の名は此の時から世間に知れ渡つた。これは全く彼自身も豫期しないことであつた。祖母アルセニエワは金力によつて、孫の刑期を一ケ年に短縮した。本人に言はせれば、寂しいコウカサスにいつまでも留まつてゐたかつたのだ。鐵と石油の寶庫であるコウカサスは、その當時に於ては、人の恐れ忌む「囚人の置場」であつた。あゝ。高架察！

尼寺の遠方此方いづれも

沈黙の中に山谿ひろがり

淡むらさきに染められし山脈は

大空をくぎり、廓然と美しくもまた不思議や

その山谿の夕まぐれこそ

黄金や眞紅の帕怕に變りゆく景色なれ。

なかでもカズベック山、その他の高嶺

雲居の上に頭擡げつ

その頭巾、皇帝の纏へるが如き花絨ぞ

すべて氷と黄金にて刺繡られける。

(レルモントフ作「惡魔」第二章第二節の一部)

レルモントフの詩想は、壯嚴、醇美、華麗の流瀆地コウカサスの風物に刺戟されないでゐたらうか？今日、彼の詩を露西亞近古文學の中に見出し得るのは、この時の流竄の賜物ではないだらうか？コウカサス山中に於ける作品の一つである「皇帝イヴン・ワンリエヴィッチと勇敢な商人カラシニコフ」は、彼をしてレルモントフの文名を、露西亞文學史の上に永遠に樹立せしめた。

それから護衛兵學校生徒時代の試作「惡魔」を完成し發表した。一ケ年の月日は過ぎた。彼を迫害した人々の住む首府ベテルスブルグの軍隊に戻つた時には、露西亞帝國が他國に向つて誇り得る詩人を出迎へに集まる社交界の貴族や貴婦人達に、夜も晝も圍繞かれたといふことを、彼自身が例の皮肉な口調で、嘲笑するやうに手紙にしたゞめて、一友人に送つてゐる。彼の黄金時代は到來した。

一八三八年には「思考」を發表した。翌年に「ムツイエリ」を發表した。好事魔多くして才人短命。彼の華やかな首都生活は長く續かなかつた。彼は一人の外國貴族に決闘を申込みたのであつた。その理由は、露西亞の宮廷に大使として派遣されてゐた佛蘭西の歴史家ブランテ男爵の倅を、ある貴族の舞踏會で、鋭い諷刺と皮肉をもつて罵倒した。男爵の倅ブランテは怒つて、彼に決闘を申入れたといふのだが、その決闘に於ては、双方無事たるを得た。佛蘭西人の彈丸はレルモントフに命中しなかつたし、レルモントフは彼の拳銃の筒口を、空に向けて打ち放つたからである。

この事件が皇帝ニコライ一世の耳に入り、レルモントフは皇帝の怒りに觸れ、そこから出て來て間もないコウカサスへ再び追放されてしまつた。レルモントフが非常な皮肉家であることは、前にも言つたが、彼も無論それを意識してやつたのである。レルモントフの詩的天才を認めた社

會はしかし彼の恐るべき犬儒的皮肉に顔を擧げてゐたことは明らかだ。

二度目に流された處は、コウカサスのビヤチゴルスク營舎であつた。軍人の流刑はおよそ兵營に決つてゐた。こゝで彼は「現代の英雄」(「わが時代の英雄」)を作つた。さうして僅かの特別恩典による賜暇を得て、彼の絶えざる失態を案じわづらふ祖母アルセニエワの許へ會ひに行き、再びコウカサスへ戻つたが、その時は、もう彼の命も生活の終りに近づきつゝあつたのだ。懐しさの餘りに、隔つる山河千里を、態々會ひにいつたといふことも、運命の暗示であつたかも知れない。

レルモントフはコウカシヤの風光に、自然美に魂を奪はれてはゐたが、ビヤチゴルスクに住む無智な人々と共に生活することは、堪えられぬ苦痛だつた。この苦痛を慰める自然界の中に、たゞ一人、ゲオルギ州生れの娘があつて、その娘を彼は愛してゐたが、彼女にはレルモントフのほかにも一人の追従者があつた。レルモントフは戀の競争者を持ちながら、この娘の母親の家に通つてゐた。

ある夜、二人の競争者は娘の家で行會つた。こゝに一場の精當があつて、レルモントフは此の男——同僚マルチノフ大佐といつた——におきまりの凄い皮肉を敵に浴びせかけた。惡意があつたわけではない。たゞほんの意地の悪い座興に、この男を揶揄つたのだが、マルチノフ大佐は

思ひのほかに立腹して決闘を申込んだ。彼は快く承諾した。彼の心中には、彼が怒らせた相手に、銃口を向けまいといふ死の覺悟があつて、約束の七月十五日（一八四一）、決闘の場所に定められたピヤチゴルスクの、静かなる山蔭に出かけていつた。こゝでマルチノーフ大佐に射殺されたのである。彼の生涯は二十七年を以て數奇な局を結んだ。

詩人レルモンツフの性格、思想は、その作品「ある妙な男」や「二人の兄弟」や「悪魔」などによつても知ることが出来る。「ある妙な男」の中のアルベニン。「二人の兄弟」の中のラージン。「悪魔」の中の悪魔や、「現代の英雄」の中のベチョリンは、彼自身の姿である。彼の詩や物語は、彼の抱懐する理想と、現實世界の不協和に生ずる苦闘が、作の主導的動機となつてゐる。詩や物語を通して見たレルモンツフは偉大な自尊家であり、厭世家であり、超人的人間である。露西亞人としては珍らしい種類の悲哀の所有者だつた。彼の詩は悲哀に満ちてゐる。彼の詩に流れる空氣は實に濃厚な悲哀である。悲哀の芽は少年時の寄る邊なき慘な境遇に培はれた厭世的性格の發露であつて、この早熟の厭世思想は、後日、ある力強い暗黒な靈魂に接觸することにより、助成悪化した病氣であるともいへよう。彼の悲哀が一般露西亞人のそれと趣を異にするといふのは、彼の初期の作品に現はれてゐるやうに、ジュコーフスキーやバラチンスキーやブウシュキンの初期又は青春時代に作られた詩の中の悲哀、例へば永遠の青春とか、永遠の貞節とか、一年中が春

であればいゝが、といふやうな、未來に於ける人力の外の無理を願望するところに生ずる悲哀とは異つて、一として地に基かぬものはない。メレジコフスキーにはすれば、前者が未來に希望をかけて、未來を信ずるとすれば、レルモンツフは過去を信じた。前者が未來の永遠を欲するとき、レルモンツフは過去の永遠を欲した。人間は過去の存在を忘却し、過去の世界を心から拭消して、未來の永遠を説くものであるが、レルモンツフは全然反對である。この點に於て、彼は基督教の教義に相反する。レルモンツフは未來を信じなかつた。それに反して過去の經驗は悉くこれを信じた。かういふ思想は、一般露西亞人には絶えて無いといつてもいゝ。従つてレルモンツフの永遠は、露西亞人共通の永遠ではなかつた。彼は空漠たる未來に求め頼る代りに、過去の悲痛や脅威を恐ろしいほど深く感じた。

彼は自分の過去を忘れるだらうか？

「神」はこの救ひの術を決して彼に與へませう

彼もまた「物事を忘れる術」を受取るまい。（「悪魔」第一章第五節後部）

「あゝ、あゝ。僕はたゞ忘れることの出来ないものを、忘れることが出来ればいゝんだが！」といふのが、少年時代からの彼の口癖であつた。彼は過去に於て彼を苦しめた、さまざまの出來事を記憶し、その記憶の苦痛を記憶して、非常に矛盾ある悲哀を味はひ噛みしめたのである。



「過去を忘れることが出来れば、おれの心はどんなにか平和だらう」と呟く一方では「過去を忘れるツて!? 馬鹿な! 神様はおれにそれをゆるして下さらないんだ。仕方がない!」といふやうな絶望と自棄の歡樂(?)を味はつたのであつた。彼は常に過去を追跡してゐるとしか思はれないほど、苦痛の過去に拘泥した。「現代の英雄」の中のベチョリンの口を借りて「おれは何一つだつて、忘れてしまふことが出来ないのだ!」といはせてゐる。

彼(天使)は靈魂を抱いて

涙と悲しみの鬨ひのこの世へ

言葉こそないが、その歌聲は

靈魂が忘れぬやうに深く沈み込んだ。(天使第三節)

レルモントフが「未來」を重んじ「未來」に頼り「未來」に縋ることを敢て欲しなかつたのは、「未來」の必要を認めなかつたからである。厭世といふ言葉は、こゝで妥當を缺くかも知れないが、厭世家(むしろ厭人家)であり、苦痛享樂家であり、悲哀讚美家であり、稀有の皮肉屋(その頃の人達は彼を「虚偽の人」とか、偽善者に對する「偽悪者」とかいつた)である彼は、一面に於ては童心の持主であり、兒童の微笑の所有者であつた。

メレジコフスキーが彼を論評していつた文句の中に、かういふ意味のことがあつたと記憶す

る。それは我々が小兒の讒言たごひごを聞くと、その文句の内容が、我々の周圍に密接に關係があるにも拘はらず、何のことだか理解に苦しむが、それはその小兒が「過去の永遠」を去ることの餘り遠くないからである。レルモントフの心も「過去の永遠」を去ること餘り遠くないから、世間に理解されず、反對に誤解されるのだ、と。話は別になるが、レルモントフが童心の所有者であつた一つの例證として挙げたわけで、童心、過去に密接してゐる心が彼をして、死を考へさせなかつた。死といふものを怖れしめなかつたのでないか? 彼は自己經驗以外に信ずる世界を持たなかつた。彼は死の存在をも否定してゐたといひたいほど、死の恐怖について無頓着だつた。小兒のやうな運命論者と、何ものをも恐れない心とは、レルモントフをして、二度の決闘に於て、敵に銃口を向けさせなかつたのではないか?

それほど過去に合體してゐる彼の悲哀が、華やかな、朦朧とした涙の霧の中にあるやうな空想的なものではなくて、總て地上のものであつたといふことには、何の不思議もあり得ないだらう。プウシュキンなど、「悲哀」の出發點を異にする點は、それもあるし、またレルモントフが絶えず英雄的言動に鼓舞され、英雄的であるといふことによつて生れる浪漫的な感情に燃やされてゐたといふ點もある。自己に對して英雄的であるのと、他人に對して英雄的であるのと、二つあるならば、レルモントフは前者に屬してゐた。彼がさうした浪漫的な感情を享けとつたのは、バイ

ロンの詩からであらう。

レルモンツフはゲーテやシェレーやシルレルなどの詩を貪り讀んだ。なかんづくバイロンを愛讀し翻譯まで試みた。そのバイロンの一面にある英雄的感情の消極面に深く動かされてゐた。英雄的であることによつて、自然に傾いてゆかねばならぬ彼は、當然の自尊家であつた。レルモンツフの詩や物語に現はれる主人公はレルモンツフのやうな英雄であり、レルモンツフの浪漫的感情と意志とを繰り返す立派な自尊家が多いのである。

英雄が苦痛を蔑視するかどうかは知らない。少くともレルモンツフはさうであつた。彼は心中の苦痛に對して、第三者の同情を求むることが、自己蔑視であると考へた。彼は彼自身の苦痛を蔑視してゐるのだから、他人の苦痛はまた自分に取つては何でもないと考へた。露西亞人にはすれば、この點に於てもレルモンツフはバイロンの非人情、非人間方面にだけ共通してゐる。人間的なバイロン主義——積極的なバイロン主義者ではなかつたといふであらう。コトリヤレヴスキの評語を思ひ出したので、こゝで紹介する。

「レルモンツフはバイロニズムを奉ずる英雄の形體をこそ立派に享け繼いだが、英雄の性格はレルモンツフ自身のものであつた。彼は常に彼自身をモデルとしてゐたから、バイロンの感化はたゞ一面に限られてゐた。バイロンの積極的態度は更に熟したる經驗の立場から見れば、レルモ

ントフに取つても、通曉に易いものに相違ないが、人間と活力ある興味との密接なる親和に關すると、レルモンツフにはそれが容易に出來ない仕事であつた。レルモンツフの境遇は物質的にも精神的にもあまりに孤立しすぎてゐた。彼自身の形體（態度のことをいふ）が偽りであるといふ自覺は、彼の過去現在未來のみならず、記憶と希望との上に、同様の呪ひを投ずる厭世への第一歩へ彼を導いたのであつた」

と。然しながらバイロンの只一面の感化が、人生の問題を解決する上に、貢献するところが少くなかつたとはいひながらも、例へばレルモンツフが軍人生活、及び護衛兵學校生徒時代に、酒色に耽溺することから辛うじて彼を食ひ止め、宗教的にも道德的にも墮落せず、ひたむきに詩作に導いていつたものは、バイロンの哲學であるといはねばなるまい。自由と自己尊重を高唱したバイロンが、右のやうな精神的苦難時代にレルモンツフを詩作の使命に忠實ならしめたのは、既に認められてゐる確かな事實であつた。

そのバイロンに導かれた彼が、自尊家であつたことは無論だが、露西亞人はそれを嫌ふ民族である。「誇る者よ。謙遜せよ。忍従せよ。」とドストイエフスキーはいつたが、露西亞人は昔から、このことを諄々と教へられて來た。露西亞といふ大自然が教へてゐる。その人間が自尊傲慢であり、出過ぎ者であれば、その人間は餓死するか凍死する國であることを。露西亞の歴史もまた教

へてゐる。自尊傲慢過ぎ者は必ず「退かされた」事實を。毎日毎夜の流刑や死刑によつて、國民は見せつけられてゐる。自尊傲慢は悪徳として教へられてゐる。露西亞文學は謙讓と忍従を説いてゐる。反逆的に事を企てる作家は忽ちにして「退けられた」。流刑に處せられ、死刑に處せられた。ブウシュキン、ゴーゴリー、ドストイェフスキーは罰せられてゐる。惡に對する唯一の武器は、これに抵抗しないことである」と説いたトルストイもその一人ではなかつたか？

然し最後まで自尊傲慢を押し通したレルモンツフは、露西亞文學者の中の變り物である。彼は自己の不遜について少しの後悔をもしなかつた。レルモンツフは自己を信じてゐた。彼自身の心の苦痛が餘りに鋭く深かつたので、周囲の人々の苦痛に對しては、同情がなかつた。冷やかに眺めてゐたとい彼のためにさげられた犠牲があつても、理想の高臺から、それを評價すること甚だ酷であつた。周囲の感情や思惑が、彼よりも深ければ、彼は賞讃しなかつたものである。それは彼の代表作「惡魔」を見ればわかる。年若い熱烈な英雄的理想家、經驗の陰道を潜つてゐた冷かな尊大家を厭世的に創り上げた消極的な靈魂は、レルモンツフの「悲哀」を、彼が多くの戀物語を取扱ふ時に於て、露骨に現はしてゐる。

彼は經驗尊重家であつた。彼は自分をモデルに多くの戀の勝利を描いた。しかもその勝利者は、一人として幸福な終局を見た者が無い！彼自身で不幸であつたのだ！レルモンツフは戀愛を

人生の最も偉大な心の轉換者であり、最も偉大なる慰安者であると信じて、戀愛を涉獵した經驗を有つてゐる。しかし結局に於ては、いつもさういふ考へが、冷やかな心の犠牲になる苦痛と矛盾に終つてゐる。彼は戀愛に成功した。しかし心の満足は得られなかつた。彼の無慈悲な解剖的な頭腦は、彼が戀愛に向つて進んでゆく感情の道を破壊したものだ。そのとき彼の戀人は、彼の眼に驚くべく醜惡に變じて映つたのである。彼の一生を通じて、心の満足を得るに足るだけの女性を發見するは出来なかつた。しかも絶えず麗はしき女の幻影を描いてゐた。その女が地上に於て求め得られない性質のものであつたことはいふまでもあるまい。異性を求めながら、その異性に對する冷やかな、非人情的な態度は、彼が最初天使として讚美した女性を、八方から分析し觀察したのであつた。そこに生ずる理想と現實の齟齬は、直ちに女性を棄てさせたのである。

戀愛に於てすら、さうであつた。宗教、未來に大部分を置いた宗教——希臘正教——に對してはいふまでもない。

「この地上にほかに世界は無い。そこには宇宙があるばかりで、宇宙は總ての感情を消滅してしまふ。われ／＼は宇宙へ消えてゆく。われ／＼は二度と再び會ふことがない。そこには天國も地獄もない。われ／＼は家を持たない野晒しの生きものだ。創造の大海に浮んでゐる難破船の破片だ」。

と彼はいつた。彼の悲哀は、「未來」を信ずることの出来ない以外に、理想と現實の食ひ違ひから生ずる過去の追憶に屬する。すべてが地上のものだ。地上の萬象に對する彼の神經はまた恐ろしいほど鋭敏であつた。

山蔭に碎かれる岩石にも強い恐怖を感じた。伐り倒される樹木が、火中に投げ込まれる時にも苦痛を感じた。雲と雲との私語をも聞いた。暗夜戸外に出て、落ちかゝる電光を手づかみにして、悲壯の快感をおぼへた。その恐怖や苦痛や快感は、凡て彼の心の内部の苦悶よりも、更に大きかつた。彼は始めて自分よりも偉大な、深刻な感情の所有者を見出して戀におちた。メレジコフスキーの批評も略さうであつたと思ふ。

「藝術家は一般に同様のものが地上に存在してゐないから、自分達の創作を美しいものとしてゐるが、レルモンツフはそれと全く反對に、同様のものが常に地上に存在してゐるから、その點で自分の創作するものは、美しく見えるといふのだ」

それはレルモンツフが掴みとつた自然の深刻な感情であつた筈だ。レルモンツフの地上に對する愛情は、一般的にいへば、頗る「非地上的」なものであつた。それは彼が浪漫主義者である所以であつた。メレジコフスキーは彼の詩に表はれる戀愛即悲哀は、世界の誰の詩にも發見することが出来ないと言つたが、要するに此處のことであらう。評者は又言ふ。

「もし死せる人が、死後に於て猶も地上を愛するならば、かくの如くに愛せねばならぬであらう。」

と。こゝに於てか、レルモンツフの思想が、反基督教的であるといふことが理解される。基督教は地上から天國へ——「此處から彼處へ」の宗教である。レルモンツフの宗教は、天國から地上へ（但し彼に天國はなかつたが）「彼處から此處へ」來るものであつた。

「レルモンツフは非人間が、人間の殻を被つたものゝやうに見へる。人間世界を閃き過ぎる流星のやうな、異境からやつて來た動物のやうにも見へる。お互に變つた姿をしてゐるものであれば、お互に見のがすことのない人間世界だから、彼は自分の姿を隠さうと努めた。その結果の極端の沈黙で、彼は世間から尊大と見做された。人々はかくして彼を面と向つて見るに堪えなかつた。彼の存在によつて受くる不安な壓迫より遁れるために、屢々部屋を立ち去つたのであつた。或る者は彼を見ると、恰もライデン燻に觸れた時のやうに、物理的な衝撃を感じた。人々はこの現象を彼の内部にある「偽」に歸結した。レルモンツフは常に人々に對して不眞實であるとなした」

「彼は人々よりも、一段高い處に立つてゐやうと努めるのだ」と考へた。然し實際には、勿論彼はそんな積極的な皮肉な態度があつたわけではないばかりか、それは何れの批評家も同様の同

情を示してゐることだが、レルモンツフは世間の人達から、かういふ具合に別物扱ひにされることを恐れてゐたのである。心中悲哀を感じてゐたのである。この悲哀は傑作「悪魔」の全篇を貫いてゐる。

彼は自分が周囲の人々とは全く異つた感情の所有者であるといふ祕密を隠しながら、周囲の人達と同じやうな人間に見られようと努力した。それが不可能であると考へた彼は、失望と悲哀を抱いて、耽溺の巷に走つた。或る時或る事で、一人の少女に惨酷な仕打ちを見せたこともある。彼の不身持ちが周囲の人々に知れ渡ると、彼はあらゆる罵倒と侮辱をうけた。その時であつた。彼は不斷自分よりも、もつと人間的な高尚な、神の理想に適つた人々であると考へてゐた周囲の人々に向つて、始めて彼等の正體を發見したやうに叫んだ。

「あゝ！俺はやつと辛つと今、彼等に打ち勝つたんだ！彼等は今こそこの俺を彼等の仲間の人だつたといふことを、信じてくれるだらう！」

實際彼は一時的に、かうした人々の野卑の温かさの中で、氷のやうな過去の永遠の苦痛と恐怖とを忘れたのであつた。かゝる周囲の人々は、彼を一種の悪魔と見た。或は悪魔であつたかも知れないが、「カラマーゾフ」やゴッリの「悪魔」とは異つた悪魔だ。彼の代表作「悪魔」といふ長詩を読むならば、それがいかなる性格の悪魔であつたか解る。それは子供のやうに純な心の

悪魔であつた。露西亞人の空想的産物である恐るべき怪物ではなかつた。彼は美しい悪魔であつたが、メレジコフスキーは彼を、いはゆる悪魔とは見なかつた。彼の言葉を藉りていへば、昔々、神とサタンとが戦つた時に、どちらに味方していか解らずに惑つてゐる樂園の天使たちの態度を決めさせるために、神はこれらの天使を地上に追ひやつて、地上生活を營ませたといふ話がある。レルモンツフの靈魂も、過去に於てはこの天使たちの靈の一つであつたのだ。

樂園を追はれた悪魔が

悲しげに罪深き世界へ飛び下つた

天國にありし日の幻影は

生々と群がつて彼をめぐる。

幸ありし日の記憶は

無辜の天使等の中にあつし時の

火天の王國に輝いた。

青空に彗星の浮ぶ時

悦びの言葉や

また彼と寵愛の微笑を交すことを望んだ。

永遠の知識に渴いて

彼が注意ぶかく霧をくゞつて踵ける時

彷徨る遊星の商隊は

無限の裡に投げ込まれる時に彼は聴くのだ  
創造の幸ある最初の出生を！

「忠實」と「愛」の聲には

疑惑も憎悪もないことを知った

そこには佗しく無駄な年月の威嚇の

夕暗の中に彼を待つこともなく――

この「悪魔」が知るところの多くは……

然し昔の記憶に彼は苦しめられた。

長い長いあいだ彼は無頼漢として彷徨ふた

荒涼の空間を絶えまなく

無数の世紀は速やかに過ぎ去つた

恰も一瞬の如く、押し合ひ舞めきながら

同じやうに――近づくかと思へば過ぎ去るのであつた。

餘りに貧しく弱々しきこの「地上」を統べるに

悪魔の技術は無比であつたが

それにも直ぐに魅力と快楽を失つて

この世は單なる無聊とこそはなり終つたのだ。（「悪魔」の第一章第一節全部）

レルモントフの「二ツの性格」は、神に對して絶えざる重荷であつた。プウシユキンのほかに、

我々はレルモントフと彼の地上に於ける使命とを持合せてゐることを記憶せねばならぬ。何故

ならば、最後にはサタンは神と和睦するだらうから。その時こそ此の兩者を結びつける働きをす

るものは何かといへば、愛であると。ソロヴィヨーフはかう言つた。

「マルチノフ大佐は神の劍であつた。彼は血に飢えし悪魔の慾望を懲すためにつかはされた者であつた」

と。露亞西人はいふ。

「謙讓であれ。退かされるぞ」

マキシム・ゴリギーは「老婆イゼルギル」の中で、老婆イゼルギルをして超人ララの運命に定義を與へさせた。

「神様はかうして、誇る者を罰しなすつたのでございます」と。こゝに「悪魔」の全章を掲げる紙数を持たないのは残念である。

浪漫主義全盛時代の五大詩人の中で、ブウシユキンが社會詩人の代表者であるとするれば、レルモントフは厭世組の代表者であり、アレクセイ・トルストイが純貴族派の代表者であり、ニエクラソフが、知識階級派の代表者であるといへるやうに、いはゆるヘゲル派の流れを汲んだ哲學的評論家ビエリンスキーの「何と豊かな貴い素質を有つてゐる男だらう！私はこの男一人に顔を向き合せてゐると、幾人かの知識ある人々と共にゐるやうな氣がする」といふカリツォフは、健全な男らしい農民詩人の代表者ではなからうか？

アレクセイ・ワシリエヴィッチ・カリツォフは、一八〇九年十月三日、露西亞東南部の市ヴォロネージュに生れた。彼の父は牧畜業者（農夫——露西亞の農夫は牧畜を副業にしてゐたが、カリツォフ一家は牧畜が本業であつたといふ）で、貧しい家庭ではなかつた。彼の父は極めて保守的な、厳しい性質の老人だつた。教育などは一通りやれば澤山であるといふ。しかも少年カリツォフの學問への執着はなかく強く、市の寺院に附屬する僧侶の小學校を卒へただけでは、とても満足は出来ない。彼は父に乞ふて漸く後方の中學校に入れて貰つたが、彼の父は學校を途中で止めさせて、家業に手傳はせたのである。彼の仕事は廣い草原に放牧してある家畜の群の見張役

だつた。家畜賣買といふ粗野な人々の社會——うるさい取引をする無趣味な空氣は、この自然の友の魂に、無聊を與へないばかりか、大草原の新鮮な微風と眺望とは、この社會から受ける、總ての賤しい惡象を拂拭するに充分であつた。牧人にして始めて享樂し得る美の感覺、民謡と傳説の中に浸る町から町へ、村から村へ、草原の上を流浪しながら、牛や馬や羊や山羊を賣り買ひする博勞たちの生活——即ち彼を繞る露西亞大國民生活の、繪畫のやうな趣致に、恍惚たる少年カリツォフの詩的本能が、大自然のうちに涵養されてゐる間に、彼はかうした境涯にある農民たちが、持合せてゐる狡猾な常識にも囚はれなかつた。

少年カリツォフのために、大草原の生活は充分な讀書の時間を與へてくれた。彼が最初に得た文學上の知識は、露西亞の傳説であつた。もつともこれは、彼が幼時に父親などから語り聞かされたものであり、この時代の詩人の誰もが、さうした經驗を通じて來たのであるが。傳説から小説へ、小説から詩へと彼の讀書は移つていつた。この時代の小説が、詩の形式による物語の類であつたことは、いふまでもない。彼が初めて買ひ求めた書物は、ドミトリエーフの寓話と詩であつた。詩は讀むためのものであると同時に、唱ふためのものであると彼は考へた。彼はドミトリエーフの詩に、勝手な譜曲をつけて、大草原の上を唱ひ歩いた。彼が十五歳にして始めて試作した詩の成因は、彼の友達の一人が、毎夜續けて同じ夢を見た。随分奇妙な夢であつた。友達は彼

にその話をして聞かせた。それを彼は詩に作らうと考へた、彼に詩形學や修辭法の心得があるわけではないが、ドミトリエーフの作品を模して、一週間を費し、これに近い形式の詩「三つの幻影」を作つた。この小さい仕事は彼一生の方針を決定したのである。詩への愛情は強くなつてゆく。彼に文學の上の感化を與へてくれたのは、ヴォロネージュ市の本屋だつた。この市にたゞ一軒の小さい書店があつた。店の主人ドミトリ・アントノヴィッチ・カシキンは、カリツオフの「三つの幻影」を読んで、こんな田舎に珍らしい才能を持ちながら埋もれてしまふことを惜んだ。書店の主人は、カリツオフを後援するつもりで、詩形學の話聞かせ、作詩法の一半を教へた。またカシキンの力の及ぶ範囲で、カリツオフの作詩に必要書籍を、わざ／＼都から自費で取寄せてやつた。その書籍の中には、プウシユキンやジュコーフスキーやデルヴィグの詩集があつた。碌々綴字さへ吞み込めない彼は、これらの作品に心を打込んで熱讀しようと思つた。親切な後援者のカシキンは、これらの詩集について、覺束ながらも解釋を施し、批評を加へながら、カリツオフを啓蒙した。カシキンはカルツオフを詩人に仕立て上げる最初の教師だつたのだ。田舎詩の強い個性は自然に伸展していつた。この時代の彼に、終生忘れることの出来ない感化を與へたものは、彼の初恋である。彼の父親は一人の麗はしい女の農奴を所有してゐた。女奴隷だ。女農奴は彼の友、彼の妹として、家事を手傳ふために、金で買ひ取られた可憐な娘であつた。娘の名

はドウニアシヤといつた。カリツオフ十七歳にしてドウニアシヤに戀をした。ドウニアシヤはカリツオフを愛し、彼の戀を受け容れた。ドウニアシヤは金で買はれた彼女の體の自由を得たいために、カリツオフに結婚を迫つたのであるが、祕密の情事關係がカリツオフの父親の發見するところとなるや、これに一刀兩斷的解決をつけるべく、用を托してカリツオフを草原の彼方に追ひ遣り、折しも市を通りかゝつた哥察克團にドウニアシヤを賣渡してしまつた。草原の彼方から歸宅した彼は、片時も忘れぬ娘の部屋に忍んで行つた。彼女はゐない！彼は父親から彼女を賣つた話を聞いた。無情な父親の殘酷な惡戯を、いかに彼は怨んだであらう。心の奥底から失望した彼は、やがて致命的な熱病に罹り、高熱のためにひどく腦神經を傷めたのである。後年に至つて、ドウニアシヤとの知らぬ間の生き別れを彼は詠じてゐる。

仄暗い黄金色の青春の曙に

私は心の底から自分の戀人を愛した

彼女の眼には聖天の光が眩しく宿つてゐた

彼女の頬には戀の焰が燃え閃めいてゐた。

五月の朝も彼女に比べると何だ？



母親のやうな緑の森も

草むくの平野の縹箔の爽々しさも

夕ぐれも、妖艶の夜も。

彼女がおまへたちから遠ざかれば

おまへ達は人の心の悲愁を分け合ふだけだ

おまへ達が何處にゐやうと、彼女さへ此處にゐれば

彼女は春に霜降らせ、晝を夜とする。

私は決して忘れまい——と彼女に言つた

「では、さようなら、私の戀人よ！

人の世が私達を引き裂くのも神様の御心だ

しかし私達はいつの日にか、また出會ふだらう」

彼女の顔は深紅に熱して來た

それから雪の白布をそつとのべるやうに——

心を痛める歎歎にくづをれて

彼女は私の惱ましい胸に縋りついたのだ。

「行くなよ。待つてくれ。可愛い輝きの鷹よ！

この苦惱の打撃を鈍らせるために暫しでも」

と私の心は打沈んでいつた

私の呼吸はうせ、私の言葉はなくなつた。

この詩の中にある「おまへ達」は、むしろ彼の家族全體を指したのである。死に直面した熱病の手から、辛うじて脱出したカリツオフは、忘れることの出来ないドウニアシャを捜すために、彼女を追ふて、大草原の漂泊の旅をつゞけたが、遂に彼女を見ることは出来なかつた。後年の彼は評論家ビエリンスキーなどに、その頃既にドウニアシャは、ドン河の沿岸に沿ふて屯する狡猾な哥察克のために虐待され、病氣でもしてゐるのではなかつたらうか、としみ／＼語つたといふことである。かうした悲劇はカリツオフの心を愈々堅く詩に結びつけた。その頃親しみ合つた二人の友達がある。一人は神學校の學生セレブリアンスキーといふ青年詩人で、一人は莫斯科文壇に所屬する後日著名なスタンキエヴィツチだつた。スタンキエヴィツチの父は、ヴォロネージュ

市に別荘を有つてゐた關係から、近づきになつたものと思はれる。このほかにもこの地方へ遊びに来たスリカエーフとも交際するほど、彼の文學修業は積まれてゐた。スリカエーフは彼の詩稿を讀んで、都へ進出することを勸説した。彼が始めての詩集「日記の中の數葉」を上梓したのは一八三〇年。彼の喜びは大きかつたが、彼の生活は彼の得意に叛いた。彼の前に置かれてゐる放牧家業と、眼前に到來してゐる出世の機運の間には、飛び越えることの困難な深い壕がある。恐ろしく懸け離れた二つの生活を營むことは無理だ。彼は現在の仕事から遁走しなければならぬと思つた。父親は彼生涯の目的や才能や趣味には、無頓着であり盲目でもあつた。金にならぬ仕事は馬鹿げた遊戯である。彼の成人を待つてゐた父親は、前途の希望と興味を失つた。彼の妹も同斷である。カリツオフは次第に家庭を離れていつた。家族との間には妥協の餘地なき渠溝が出来た。家族に見限られた彼、金もなければ土地もなく、鉄も鋤も耕馬もない貧しい男は、これから先、どうして生活していかうかと考へながら、大きな檜の卓子の前に、一日坐り込むことも、珍らしくはなかつた。

「俺に貧乏をくれたのは、たしかに没分曉漢の親父だ。しかし親父は貧乏のほかに、もう一ツ生れつきの代物を、俺にくれてゐる。それは勇氣だ！」

然り。勇氣だ！翌る年に家事の都合で、彼は莫斯科へ上つた。彼の懐中にはそれまでに書き溜

められた勞作があつた。スタンキエヴィツチの骨折りで、彼の詩「指環」が「文藝雜誌」に載つた。これが文壇の注目を、次第にこの田舎詩人に集める大きな働きをなした。この「指環」は、そのほかの作品、例へば「若い收穫者」の季節」と同じく、人間の魂の奥底に萌へいつる、神秘的戀の心理解剖である。その頃からカリツオフを指して、「農民詩人」といふやうになつた。文壇に於ける彼の地位や名聲は、しかし、彼の後から飛び出したネクラーツフや、ナドソンほど高くはない。かくの如く、家畜の賣買取引である父親の用事をおびて、莫斯科やペテルスブルグに出かける機会を、彼は屢々與へられはしたが、都會に滞留する期間は短かかつた。都會から歸宅するたびに、田舎の狭い地方的生活が嫌になるのである。殊にスタンキエヴィツチの親切な奔走によつて、彼の著作が莫斯科で出版され（一八三五年）忽ちにして文壇的地歩の確立となり、賞讃の的となるや、都會生活に憧れてゐる彼は、田舎の俗事が愈々嫌になるのだつた。都會に於ては、スタンキエヴィツチの紹介で、文壇の中樞人物、即ち哲學的な思索傾向を與へた批評家ピエリンスキーや、プウシユキンや、ジュコーフスキーや、ヴィアゼムスキー太公や、後年の文豪ツルグニエフなどゝ會ふことが出来た。

「彼（カリツオフ）は、つゝまじやかに足を揃へて投げ出し、折々咳をしながら、部屋の片隅に腰かけてゐた。彼は咳をするたびに急いで手で口を掩ふた。彼は自分の身のまわりを、羞かし

げに、もじん／＼しながら見廻しては、熱心に耳を傾けて、話に聴き入るのであつた。」とツルゲニエフが書いてゐる。その後の著作集は、文壇外の一般讀書階級へも廣まつた。それはこの「家畜賣買業者」詩人の心の叫びが、その時代の文人には得がたい自由さと新奇さを有つてゐたばかりではなく、彼の用ひた詩の形式こそは、從來の國民詩謠や抒情詩や史話（「口傳文學時代」参照）などが、昔のダニロフやリブニコフやヒルフェルディングによつて發見され、トレヂヤコーフスキーやスマロコフなどによつて、作詩作曲の上に、大いに用ひられ改良され、メレツキーやメルツニコフやデルヴァグ達によつて、新しい生命の呼吸を吹き込まれて來たものには相違ないが、たゞ異國情緒に誘導されて、露西亞の衣を纏ふたものに過ぎず、カリツォフ以前にも、かやうな農民詩人はあつたが、それ等は殆んど申合せたやうに、ニエクラーツフのやうな都會人の眺めた農民生活記録であつて、カリツォフの作品から見れば、力の微弱なもので、カリツォフの作品を通貫して流れる純粹農民の魂の河は、認めることが出来なかつたからである。かやうな先驅的作品に缺けてゐた純粹寫實による地方色——カリツォフの有つ地方色は、南方露西亞のそれである——の生々とした美しさと、農民の心を支配する歡樂と悲哀と力と、年若き農民男女の心の奥底に呻く苦惱や、燃ゆる情熱を、何らの技巧をも用ひず、感傷にも陥らずして、描き出してゐるからである。

文壇の先覺者たちは、擧つて彼の作品を推賞した。カリツォフに取つては、かうした先輩たちと交際することによつて、其人達に對して抱いてゐる崇拜、憧憬、敬慕の情は一層強くなつた。先輩たちの言葉は、一言半句と雖も、彼を鼓舞するに足る力があつた。新らしき知識學問を體得して、國民性に適應する寫實主義の宣傳に努めてゐる先輩たちの人格、思想の波は、彼の心に浸透して、知らず識らずのうちに、彼もその大波のなかの一つの波となり、近代露西亞文學黎明期への一大潮流をなしたのである。

一八三七年、時の皇后のゾオロネージュ市遊行に隨伴したジュコーフスキーは、その牧畜の家にカリツォフを、訪れたが、この時カリツォフは皇后に謁見の光榮を辱ふたといふことで、市民の民衆の誇りと歡喜の中に、カリツォフは殆んど狂せんばかりの名譽に感激したといふ話が傳はつてゐる。かういふ例は滅多にない田舎のことだから、市民大衆の喜びは想像し得られる。この名譽がカリツォフをして、露西亞の一般社會に、巨大なる影を投げる因となつた。正直な彼は、この大きな背景に囚はれてしまひ、哀れにもその誇りを誇り過ぎた。これが市民大衆との間に一つの障壁を形づくつた。この時にも彼の家族は市民の味方についた。彼は父親から敬遠され、家族の中で誰よりも彼を愛してゐる妹までが、彼に口を利かなくなつてしまつた。彼が肺を犯されてゐることが、その時分から確實になつた。（ツルゲニエフの手記を再讀せよ）。彼の肺患は次のや

うな出来事で重くなつた。二度目の戀である。戀の對象は教養ある美しい、しかし不幸なことに心の冷やかな地方娘であつた。後でわかつたのだが、この娘はカリツオフを愛してゐなかつた。彼女は至つて無造作にカリツオフに接近した時の、その態度で、無造作にカリツオフから離れ去つてしまつた。彼女は土地の青年士官と駈落ちしたのである。カリツオフの詩は詠ふ。

-318-

お前は別の路に一人で行つてしまつた

それはお前の歡樂と賤しい娛しみのためだ

それはお前の疲れた情慾と戀の閃めきのためだ。

かうしてお前は他の男を選んで行つた。

しかしその路はいつまでも續くだらうか？

お前の魂に残されるものに、何の價値があるだらう？

お前の選んだ愛人が

ほんとうにお前に心を捧げて、眞實をつくしてゐたか

自分を犠牲にして

お前の魂を救はうとしたらうか？

その男は今どこにゐるのか？ さあ

俺に會はしてくれ

腕をひろげてお前もろともに

人生に手を携へて歩くために、祝福してやらうではないか。

だが違つてゐる！ お前は棄てられて

たつた一人

ひとりぼつち——崖の上に

狂氣のやうに悲しみ、魂を打たれて

仇に救ひを求めてゐるが、それは無駄なことだ

さうしてお前はだん／＼絶望に傾き

お前の禍ひと共に最後に近づいて行くのだ。

さあ、お前のお手をおくれ、そこにはいつも、

破滅にゆくお前を救ひ出す時間がある。

まあ、お前のお手は何て冷たく顫えてるんだらう！

お前と一緒に歩いてみると、俺は恥かしくてならない。  
嘲けられたり、群衆に怒鳴られたりするから、

だが、俺はしっかりしてゐる、俺は

お前の側に身をさゝげ、止まつてゐるよ

俺はもう一度お前を救ひ出し導いてやる

有毒な罪の坑から。

そこでお前はもう一度こゝに來て

祝福された幸福と歡喜の中に入つて

俺の上空の上に再び輝くのだ――

俺と俺の路の上の星のやうに。(逐行譯)

その後彼はピエリンスキーに招かれて、首府ベテルスブルグの邸に屢々滞在することがあつた。父親の商賣はいつも彼を田舎へ呼び戻した。彼が最後に首府へ上つたのは一八四〇年だつた。彼はベテルスブルグに永住したかつたのだが、境遇はいつもこれに反對した。最後の歸郷の際には胸の病氣はひどく悪化してゐた。彼は病氣から受ける貧困の苦痛を切實に體驗した。家人は彼を構ひつけなくなつた。父親は既に老衰の境にある。商賣は面倒になり且つ巧く行かなくなつた。

カリツオフは病みほゞけながらも、父親の仕事の手傳ひをしたが、この老人と病人の働きでは、これまでの仕事の半分も片づかない。農夫としての彼には、もはや力がない。終には家人に棄てられてしまつた。彼は病床についた。暗い部屋の片隅の寢臺に仰臥しながら、もはや實現不可能な夢のみ描いた。夢の中で生きようと蒸搔いた。他の多くの詩人たちが有つてゐたやうな、夢幻の憂鬱を知らない彼、潑刺たる心の力の持主であり、ある點では、なか／＼數理的な頭腦の持主である彼は、再起の望み絶えし時にあつて、猶、ベテルスブルグへ上つてからの、楽しき自由な生活を夢想するのであつた。

當時にあつては、どんなに偉大な勢力を有する文人でも、財産がなければ、本來の創作に従ふ傍ら、どんなに汚い賤しい仕事でもしなければ、生活を立てゝゆくことは六ヶ敷かつた。文筆では食へなかつた。病床にあるカリツオフも、都へ出てからの生活を支へる職業を捜すことについて頻りに考へた。然し一切の煩悶に對する解決はやつて來た。カリツオフに見れば、全く意外であつたらう。彼は恐るべき多量の咯血に意識を失つてしまつた。彼が息を引取つたのは、一八四二年十月二十九日だつた。農民生活の歌手は、都會生活の夢の中に、獨り寂しく此の世を去つたのである。ピエリンスキーはいふ。

「感情的戀愛は彼が生涯の曙を照した。かくて素晴らしく陰暗な紫藍色の情慾の耀きの中に、

彼の生涯の夕は暮れてしまった」。

短い一生であつたやうに、彼の作品も多くはない。彼の作品は詩も歌謡も、當時の寫實主義の最も新らしく、眞實な長所をのみ吸収した。韻律的抒情詩の官能と、寫實的の美しいなだらかな自然描寫の才と、人の魂を揺り動さずにはゐない、強い心の力とを彼は有つてゐた。人の魂を打ち震はす強い精神力の半面には、一平凡人としても、露西亞民衆の心の底を流れる、憂鬱な暗流が全然ないではなかつた、が、彼の明るい思想に壓伏されて、纒かに感ぜられるだけである。この失戀詩人は愁人型の露西亞人ではなかつたといふことに歸着する。高等教育をうけなかつた彼が作詩用語は、従つて自然のまゝであり、原始的であり、激しい感情は常に生眞面目に遠慮を命じられてゐる。その大部分が農民である露西亞民衆の感情と情緒と、彼等の生活様式と、南方露西亞の方言の抒情主義的結合調和を企てる上に、彼は非凡の手腕を示した。その詩に見る語句の平行などは、眼中に置いてゐない觀がある。初期の作品が、よしんばブウシユキンその他の影響をうけてゐるにせよ、間もなくその型を破つて、眞實に露西亞人の魂から滲み出る感情の囁きを、彼獨特の形式に盛り上げたことは、「自然に作られた天才」の名に値ひする最大の理由であらうと思ふ。ブウシユキンが貴族の生活を描寫したやうに、カリツオフは彼をめぐる農民の實生活を活寫した。正に「農民の中から生れた」詩人だつた。

彼の死後に於て輩出した多くの農民作家たちの先驅者として、彼は永遠に露西亞民衆の記憶の中にあるだらう。露西亞民衆の言葉を借りていふと、彼は「露西亞のバインズ」であり「露西亞農民作家の祖父」である。この意味に於て彼の作品は研究されねばならぬし、またそこに彼の作品は繋がれてゐるのである。彼の天賦の力量は、その深さと變化と種類にかけても、可なり心理的に取扱はれてゐる點に於ても、民衆の隠れたる藝術的發露ともいふべき民謡の創作に發揮されてゐる。彼の人格の力は、それを在來の舊套的手法によらないで、樂々と表現し、感情に具體化して民謡の中に吹き込んだ。彼の民謡はスラブ民族にとつては偉大なる救ひの聲であり、慰安の囁きであり、激勵の叫びであり、向上への鞭であつた。

田舎青年カリツオフが、先輩ビエリンスキーに會ふことによつて、道德とか哲學とか、その種の問題が存在することを知つた瞬間からの、大きな人生に於ける覺醒は、カリツオフの非組織的、非統一的な頭腦に、極めて自然な、澄明な、しかし何處かに探求の便の知れない、或る原始状態の神祕主義的的人生觀を與へたのである。而もそれさへ、人生と自然に對する明確な考察を、哲學といふ觀念から全然切り離した立ち場で、彼に與へたのであつた。彼の作品に現はれてゐる、彼が唯一の愛の對象であつた自然と人生なるものは、その作品が示すやうな「明るい微風のそよぎ」であり「收穫の野の耀きわたる」自然であり「よろこばしく土を掘る」人生であつた。

希望や愛やそれ等の微ばしき心は、プウシユキンにもレルモンツフにも見出すことは出来ない。しかも彼の楽思想は、楽天のための楽天ではなかつた。彼は一度ならず二度までも、失戀の深傷を負ふて煩悶した。彼自身を離れて見ても、彼の周囲には、樂觀的な光明としては微塵もないといはねばならぬ生活と戦つてゐる、無数の農民が、病魔の苦痛と饑餓の威嚇に責め虐まれてゐるのである。彼はそれを熟知してゐる。しかも彼はその悲惨な事象から或る力を得た。

見よ！ 鞭粗族の侵攻以來、引續き受けて來た露西亞貴族社會や特權階級からの壓迫と侮蔑と、代々の専制政治家によつて加へられた迫害と苛斂誅求との、いかに堪えがたきものであるかを！ それは異民族と同一民族の間に於ける人間同志の、血みどろの闘争である。しかも彼等農民の頭上には、恐るべき不可避の、大自然の脅威がのしかゝつてゐるのだ。一ヶ年の半ばを占める有害危険な天候、旱魃、洪水、饑饉とそれに原因する悪疫の來襲、その他の災厄と不幸な出來事が、農民の肩にかゝつてゐるのである。何たる忍耐力だ！

樂天的氣風や自己否定や、犠牲の精神や運命論者的「あきらめ」の思想——古來、傳説俗謡や民謡に詠はれて來た、これらの驚くべき事實の直面凝視は、カリツオフの作「傷ましき運命」や「村人の回想」や「あらしの中で」や「十字架」や「路」の中に、とうてい抵抗すべからざるものとして、最初から運命づけられてゐる偉大な力として、人生の不幸を解剖した結果、迸りいづ

る深い吐息となつて現はれてゐるのである。それには相違ないが、しかし彼は肉體上の悲哀、哀悼、絶望の吹聴者では斷じてなかつた！ 肉體上の苦痛懊惱には、敢然として堪え抜かねばならぬ。これに打ち勝たねばならぬと考へた。

「悲しくはあらうが——歡ばしい微笑をうかべて戦線に向ふのだ」。「鶯の歌をうたひながら闘ふのだ」とカリツオフは絶叫してゐる。カリツオフは絶叫してゐる。カリツオフの體内にある露西亞農民の剛毅な氣魄は、いかに絶望すべき場合にも、斷じて望みを棄てず失はず、人生の突撃路を眞一文字に奮進すべきことを高らかに唱つてゐるのだ。

いかなる難關に直面しようと、眞直ぐに立つことを忘れるなよ！ 汝の靈魂のために勇敢に戦へ！

と彼はいつた。これがカリツオフの心である。

「幸福に出會ふには、まだおそくはない——われ／＼の生涯は日夜に耀くのだ！——眞晝の太陽は暑い——だが夕方になれば和らいで來る。」

と彼は謡つた。「友へ」と題する短詩の中にも、同じやうな言葉がある。そこにスラブ民族の驚嘆すべき「あきらめ」と「たゝかひ」の心がある。或る時は悲愁を、或る時は復讐と怨恨を、また或る時は諧謔を、これを通じて知り得る傳説や、傳説俗謡や民謡と、カリツオフの作品とを比

較検討するならば、そこに露西亞民衆が「あきらめ」て來た「あきらめ」と「たゞかふ」て來た「剛氣」の精神にびつたり符合する、微妙な魂の存在を發見するであらう。その民謡史論に表現された人間性の弱さ強さは、直ちに人の胸へ潮のやうに押寄せて來る。詩人カリツォフの文學的活動が終りに近づく頃、露西亞の文壇は寫實に立脚する浪漫主義が、そろ／＼下火になつて、雄大な「近代露西亞文學」の時代に入る自然主義、人道主義、神祕主義の勃興機運を迎へつゝあつた。

收穫 (カリツォフ)

赤々と燃えて

曙は嚴にやつて來た

もや／＼と霧は散つた

大地の面に。

ゆらめく光の中に晝は來た

太陽の耀きと共に。

霧は高く舞ひ上つた

山嶺の頂上へ。

重々しい雲となる。

黒々と。

その打ち顛へるは

陰暗を追ひやるのだ。

彼女(雲)は沈思の中に

打ち顛ひ、恰もそれは

彼女(雲)に遠き

母なる土地のことを想つてゐるやうに。

その途中で暴風が

荒々しく吹いて

高らかに彼女を捉へ

旅へ旅へと送つて行く。

彼女はびたりと

稻妻や

陰影や雷鳴や



村人たちの  
全家旅は來つて  
彼等の娘(畑)に  
鎌を入れるのだ。  
堆塚は黄金色に  
終夜たちつくし  
軋る荷馬車の  
歌は少しもやまないのだ。  
麥株や滑車輪は  
物置小屋の中に見ごとに置かれる  
さながら王子のやうに誇りやかに  
首を擡げて。  
收穫は終つた、  
愛する眞紅の太陽は最後に  
秋の涼日に向つて

いまどつてゆく。  
だが暖かな  
村人たちの燈火につれて  
聖母にさゝげる  
祈りの聲が起つて來る。(逐行譯)

(完)

生々した虹の衣を纏ふた  
戦ひのやうに翔んで  
到るところにひろがつた。  
かくて彼女は打ちはたくともあり  
涙を流すこともある、それは  
廣々として重々しき涙  
その重々しく夕立するところの  
地のふところに  
彼女はまたひろくと廣がり渡つた。  
そのときは清い水  
大地に沈く。  
大空からその時また  
愛する赤い太陽が顔を出した。  
村人たちは  
眼を離し得なかつた

彼らの庭園から、と  
彼等の緑柱玉いろに耀く田畑から。

麥粒は重く實り  
烏麥はすく／＼と立つ、  
かと思へば夢見るやうに腰をかどめる。  
大地の面へ。  
親切さうに頬笑みながら  
神から遣はされた賓客のやうに見える  
彼等の左右の  
黄金の日へと。  
黄金の波は  
微風から起つてあたゝかに  
ざわ／＼と漣たてゝぎら／＼と光を放つ  
地上一面。

村人たちの  
全家族は來つて  
彼等の娘(畑)に  
鎌を入れるのだ。  
堆塚は黄金色に  
終夜たちつくし  
軋る荷馬車の  
歌は少しもやまないのだ。  
麥株や滑車輪は  
物置小屋の中に見ごとに置かれる  
さながら王子のやうに誇りやかに  
首を擡げて。  
收穫は終つた、  
愛する眞紅の太陽は最後に  
秋の涼日に向つて

いま江つてゆく。  
だが暖かな  
村人たちの燈火につれて  
聖母にさゝげる  
祈りの聲が起つて來る。(逐行譯)

(完)

出文協承認番號 ㊿ 160116 號

史學文亞西露

昭和十七年九月十五日印刷  
昭和十七年九月二十日發行

◎ 定價貳圓

著者 大泉黑石

發行者 岡本正一

印刷者 東京市赤坂區溜池町三〇  
谷口熊之助

印刷所 東京市麴町區五番町一二  
谷口印刷所  
(東京四四九)

發行所 東京市赤坂區溜池町三〇  
電赤坂(48)六三六二四八至  
振替東京一七〇四三六

發行所 霞ヶ関書房

配給元 日本出版配給株式會社

會員登錄番號 (106502番)

# 印度の独立

筈見一郎著

B6判三三〇頁  
一・八〇テ一五

肉魂を英國の歴史にぶつけた獨立運動の生成と發展の路筋を生々しく描いて、英帝國主義下に歪められた印度の全貌をさらけだした！

# 南国の日射し

岩倉 榮著

B6判三四〇頁  
一・八〇テ一五

隨筆の興味は必享著者のもち味にかゝるのであらう。この著者は洋の東西にわたる素材に豊かな愛情と詩情をこころばせた。

# 戦ふソ聯の現実

竹尾 式著

B6判三二六頁  
一・六〇テ一五

古代ロシアに筆を起してその性格を追求し、獨ソ戦下の現状を世界史の一環として把握した。永遠の課題、ソ聯研究の最新版

980.2

035

終